

江戸名所図會
十九

409
19



三圍橋社

小梅村田の中心あり

別當の天台宗

延命寺と

号と神像の弘法大師の作りより同大師の勧請ありと

年間三井寺の源慶僧都再興と慶長の頃迄の今の地

のりし以後此地より移して當社の内陣は英一蝶の畫あり

辨慶の羊身の圖を掲げ

五元集 牛嶋のあまの神前より酒をす

夕立や田をめぐその社あり

宝番弁 其角

社僧云元禄六年の夏は早慶とて六月の廿八日村民ありて神前より酒をす
祈願と其角の角も當社より祈願とてはひ一人の中に白雲とてありて其角は請願の發令とて
すすめりて農氏よりありてを連ねて當社の神前より酒をすに感念ありありとて日膏
命も為社よりあり

牛御前王子権現社

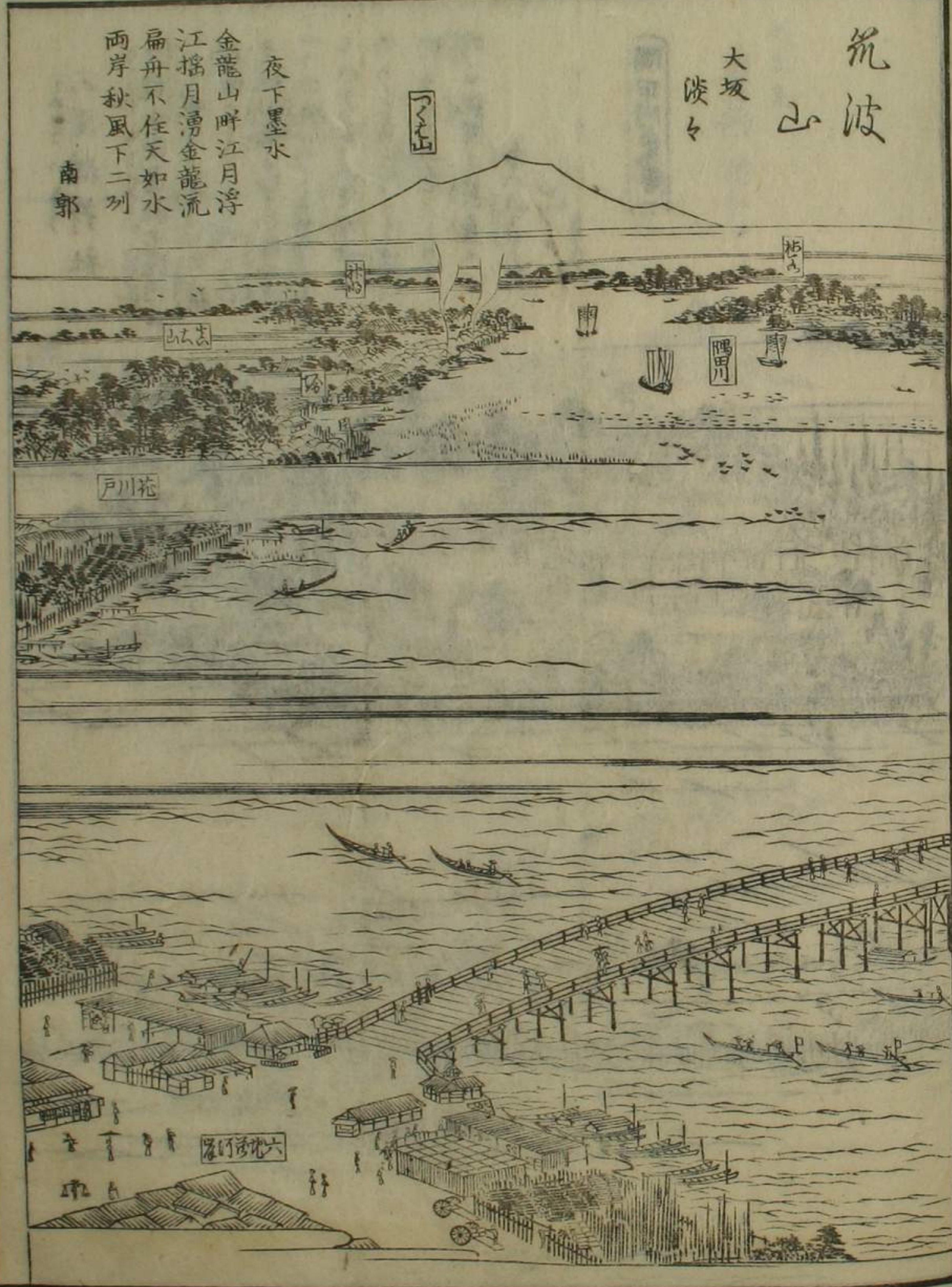
同所北の方より

別當の最勝寺と号と牛嶋の

總鎮守より祭禮の隔年九月十二日北本所石原新所の猿呀へ神

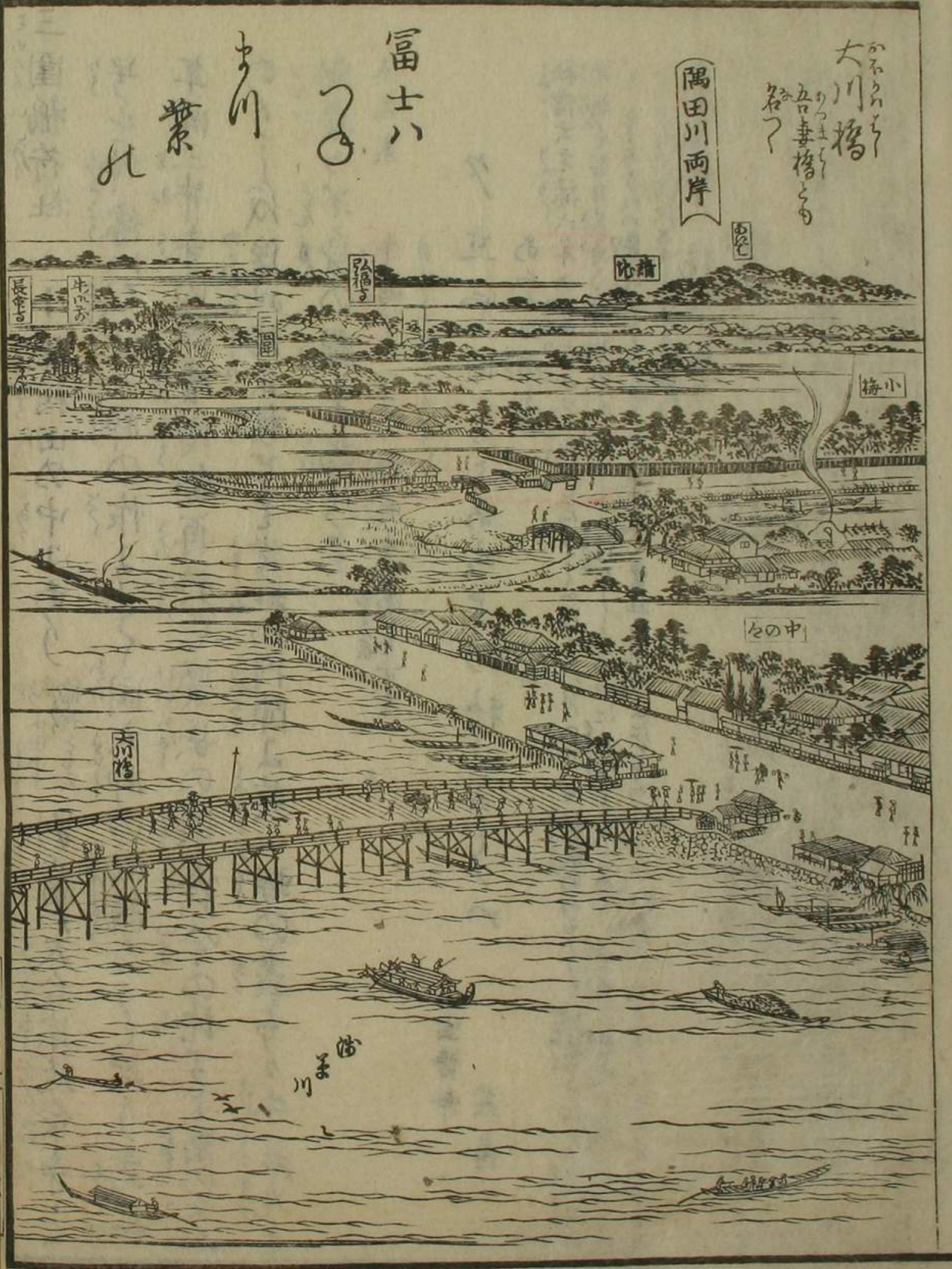
幸ありて同十五日小帰輿と祭神素盞鳥尊と牛御前と清和天皇第七





夜下墨水
 金龍山畔江月浮
 江搖月湧金龍流
 扁舟不住天如水
 兩岸秋風下二列
 南郭

筑波山
 大坂
 淡々



隅田川兩岸
 大川橋
 各々

富士八
 子
 業
 川

梅小

中

川

三圍綿苧社

三圍綿苧社の境内に
 一老嫗あり、薪炭の徒
 林供をせざる、唯この
 老嫗田面より拍堂の
 一つの狐のくともあり、
 それを食ふ老嫗は
 わらじをじり、後の
 狐もまた地とるなり
 此記を其角
 白ひげを
 あり

隅田川東岸



五元集

早稲酒

きりね

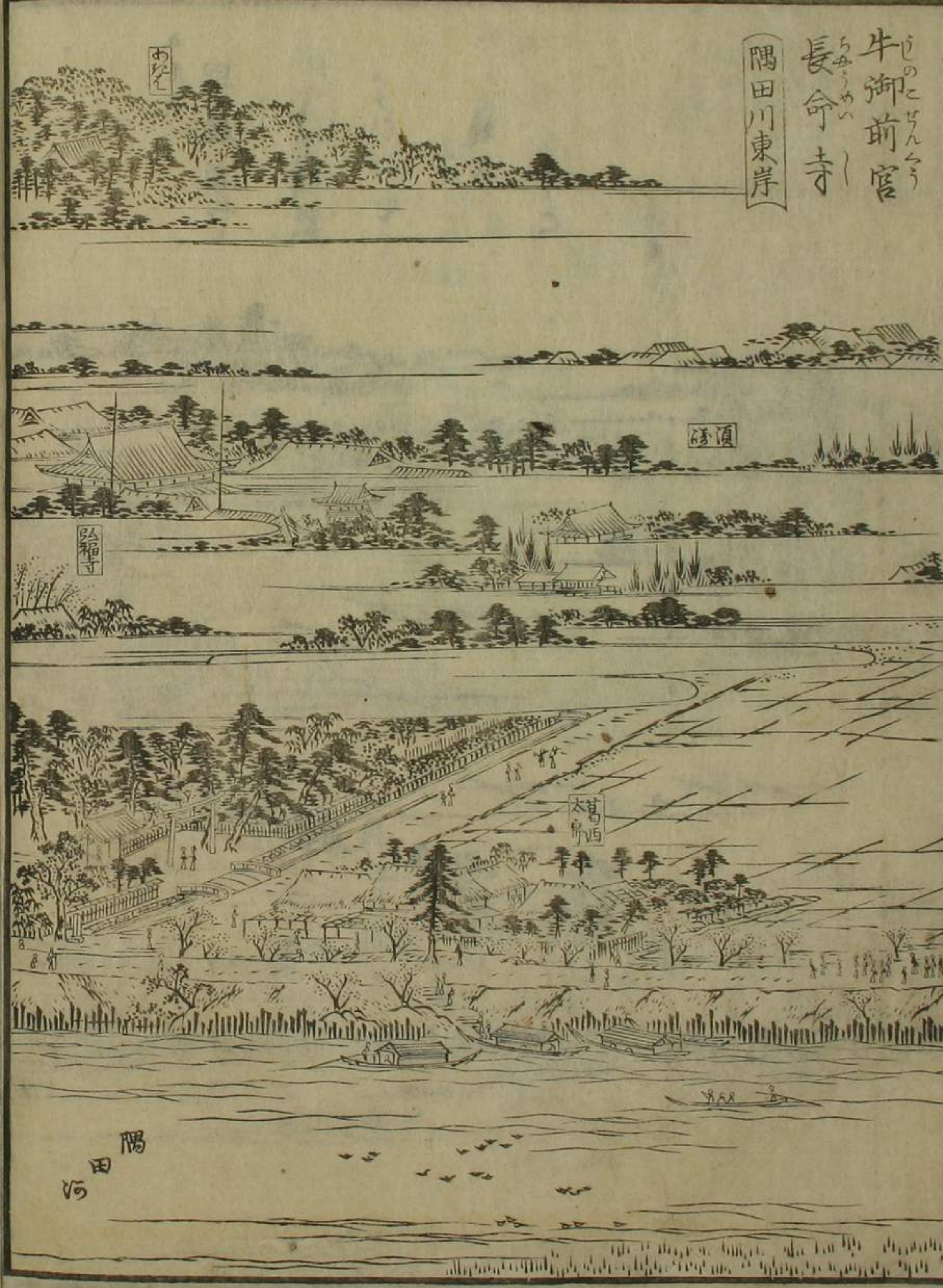
ふいぶ

焼

ま

其角





隅田川東岸
 牛御前宮
 長命寺

五元集
 牛御前
 是やこれ
 西を
 字人
 下
 其角

隅
 田
 河

法華經十部供養碑 今内陣に収めあり長三尺三寸あり幅一尺六寸あり厚さ

碑陰銘曰 奉造立釋迦像一軀 貞觀十七丁未天三月日 法華十部 明王院

の碑は往し年尚社境内の土中より寫得たりと云々今本殿の中より收む青石より其質ゆらて 聖一上下兩換しと全かりと碑面は立像の釋迦如來の容を刻し碑陰は直搗ありと云 數字をを懸むとていとも法華十部 貞觀等の文字を刻し一と云々鮮明ありと云

千葉五郎胤道旗 一流 別當最勝寺に舊く東鑑に治承四年庚子九月十九日 武勝上徳権公廣常公泰入をすことと云々下總に國府五郎胤道の ちより依千葉公常胤子息を相具しと云々の總の國府公泰會と云々下條下に國府五郎胤道の 多を如たりと云々准后親房記に壽永三年二月六日鎌倉より福原へゆり小堀の中より常胤の 國府五郎胤道同於東六郎胤頼等の名あり胤道の同胞と云々母は秩父左郎重弘の女あり



國分広司 千葉五郎平朝臣胤道

長三尺一寸三分 幅一尺九分 考幅九分

同漆狀壹通 其文は尚社に往古先祖千葉公常胤子息の信社たるに依て是を収るるを記 として慶長十八年九月十五日國分宗玄御正勝親向とあり 石橋山合戦より分捕の面々書換の通り見奉る候へり云々記し十月 廿三日景泰とありと云々花押を記し直貫決しあり

小田原北条家神領寄附狀 壹通 其文は順徳天皇の御田合戦八十箇所 興し戊辰霜月十五日景秀とありと云々花押を記しありと云々按し戊辰の永祿十年戊辰の

當社の往古鎌倉石府將軍頼朝卿宗教厚く養和元年辛丑宮 社を經營ありと云々小於てふ葉公常胤其頃當國の主たるふより許多の

田園を寄附し奉り信を厚かりとあり然るに永祿小至北條 氏直老臣大道寺景秀小命一先親の例に依り神領寄附あり則

社前の水田是なり

寶壽山長命寺 遍照院と号し天台宗東嶽山に屬せり本堂の

等身の釋迦如來脇士の文殊普賢般若十六善神等の像を安す牛 鳴辨財天傳授大師の作あり長命水 日一堂の後の方より延壽推 堂前よりありと云々

柳樹 堂の左の方よりあり元祿五年壬申江戸御菓司大文保主水某相別無倉のそい麻倉のそい 自在庵舊址 堂の右竹藪の中より能登水園よりある室をむせりて住たりと云々

雪見よらぬのちとらるる

當寺昔のいさゝの庵室より寛永年間 大樹御遊獵の初少御不豫

小あらせられし此寺内より休せたまひ庭前の井の水をりて御薬を服

ありし須臾中へ常小るらせありし此井より長命水の号を賜り

寺の号をも改むべし 台弁ありし末長命寺と稱す 昔の常泉寺

殊更當寺の雲の名所なりて前より隅田川の流をうけて風多たらきといふは

牛頭山弘福禪寺 牛御前宮の東に隣る此辺を須崎といふ 黄檗流

の禪室中へ洛陽萬福寺を模して本尊の唐佛の釋迦如來左右に迦葉

阿難ありて定山鐵牛和尚延寶紀元癸丑創造す毎歳七月十五日大施儀鬼修行有

佛殿 額 聯 本寺の 柱は掲 本庵の 筆あり

大威徳 聯 本寺の 柱は掲 本庵の 筆あり

覺天日月久晦祖燈雪涅盤 卑地雷音雷林木冬華葉

見相傾身敢保未忘法ね 揮毫布比自然海界黄金

出後界上至再弘福禪林人々奉 牛頭山中新建大聖堂殿なる修依

聯 左の 柱は掲 右の 筆あり

木犀 佛殿 額 聯 本寺の 柱は掲 本庵の 筆あり

刹竿旗 座禪堂 佛殿 額 聯 本寺の 柱は掲 本庵の 筆あり

閑山堂 此和尚の侍らし一器と

一株老桂長垂蔭 萬斛天香遠襲人

浴室 天王殿 鐘樓 橋

日未月世衲侶法衣永殷克 浴積山堆摩詰家風真廣大

道泰玉麟現瑞 林東墨鳳夏儀

大生昔拜佛慶云須言 高懸寶鏡如鏡終身信身

鎮守宮 天宮春日八幡宮 鹽竈明神等の諸神を崇む

天桂石 鐘樓 橋

天王殿 鐘樓 橋

鐘樓 橋

橋

橋

橋

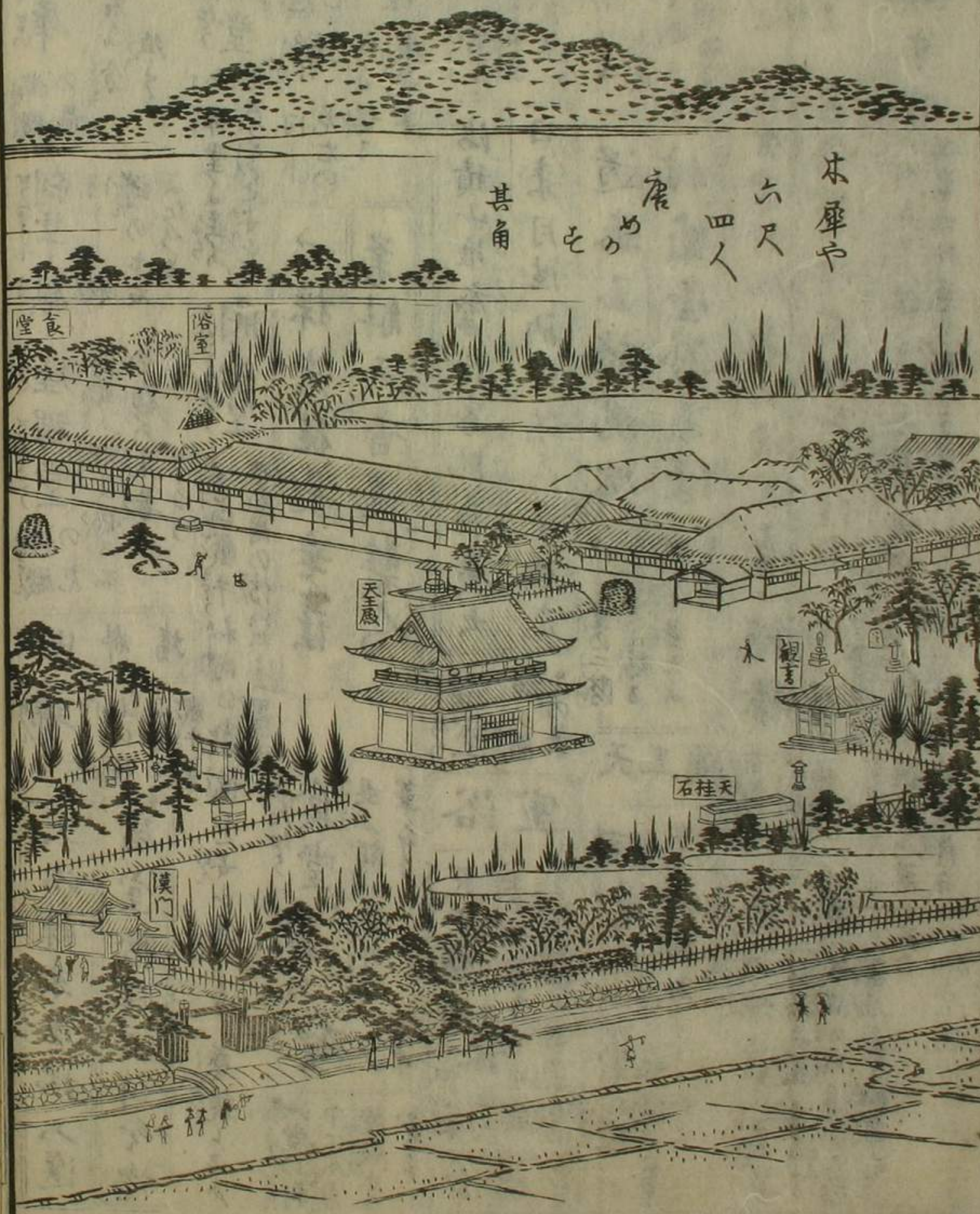
橋

橋

橋

橋

弘福寺



本扉や
六尺
四人
唐
其角

元禄二年仲秋
初之隅田川
記行
牛頭山より
松崎より
斎堂より
りれれれれれれ
初魚をいけり
眼赤のめれり
斎堂了
あられ
ゆい
あられ
秋風

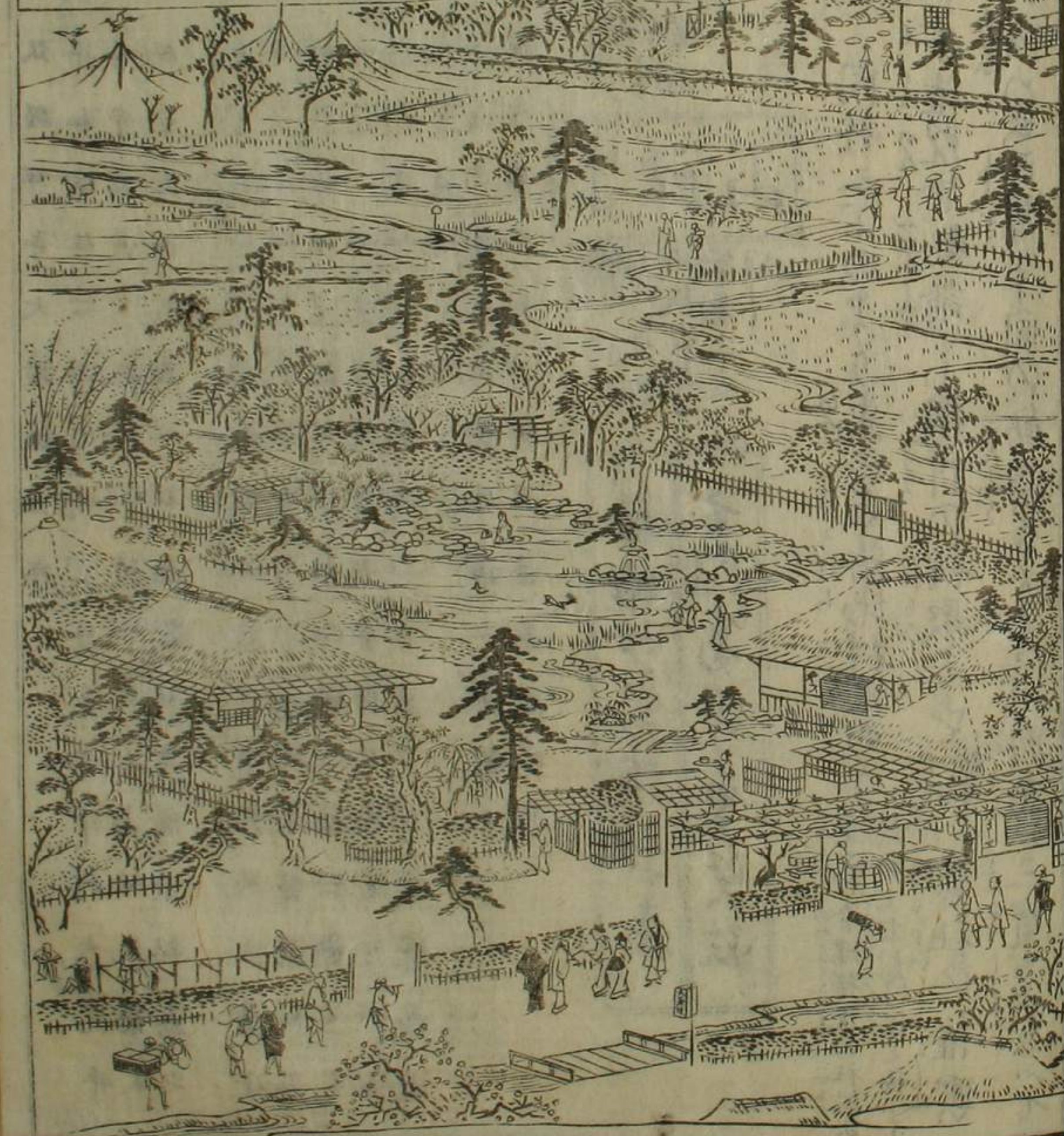


遊牛頭寺 南郭
門外長堤墨水流
江東寶樹倚牛頭
金龍閣誰家宴
玉女陵波何處遊
藏艇舟搖湖岸繫
忘機鳥下晚洲浮
到來心地應空澗
那更風烟起客愁

庵奇
 俗回請地
 秋葉権現の
 切をみる
 唱のまてとも
 定まるき



須崎の
 請地秋葉の
 辺傍まの向
 西肉店多々
 各軒をりま
 鯉魚を畜
 酒客かやく
 らに宴飲ま
 中も葛西
 本并といふ
 葛西二年
 清重のそを商
 ありと云付のれ
 とも是非ま久
 じうやといひ
 昔麦飯を
 賣たりーの
 計とてろろ
 麦汁と唱たり
 一も今のまやとのミ
 らひて麦汁と野を
 みる人すれぬ
 ありぬ



牛頭山弘福寺大鐘銘並序
瑞聖牛和尚住弘福之明年修葺寺宇將大
伊氏伯耆守直武公與王心院太夫人壽林元榮大
師葑心施金為造巨鐘以利幽顯寓書徵余銘為之
銘曰阜兮有大法將整飭林官兮曷殊天匠幸值
牛首之母子全乃召息氏兮乃簡赤金範斯巨器
賢守兮禪林曉昏考擊兮萬歲以千春億兆樂業兮壽海
兮永鎮祈慶兮子孫振振以空為口兮密婁為毫
豈鮮斯行慶一孫振振以空為口兮密婁為毫
歸仁勤兮莫一孫振振以空為口兮密婁為毫
擬書厥年歲在正宗世四世高泉激敬撰
支貞那傳臨濟正宗世四世高泉激敬撰

漢門總門をいふ
鐵牛の筆あり

牛山

聯句
右
筆者上よ

福地弘安法系集
玄門高河聖法

秋葉大権現社 同所三丁あり東の方請比村あり
遠列秋葉権現を勧請一稿祈の相殿とと
あるへうへ或い云正應年間の勧請ありとも別尚ハ三寶末末あり

千葉山満願寺と号と神泉の松と稱するの社前ありと松の控より
清泉涌出するを諸の病み驗ありといふ
境内林泉幽邃うて四時遊觀の地あり門前酒肆食店多く名
主例を構へて鯉魚を養ふ

清瀧山蓮華寺

寺嶋村小あり

寺記云く昔此の海原あり後世佛下流と
あり頃高祖を創建あり候と云ふ所の條ありと

本尊阿弥陀如来の像い惠公僧都の作といふ
太子堂奉堂の布あり奉尊聖徳太子の像ハ十六歳の真影にて
太子自彫造あり一と云北条經時の念持佛より往古ハ相及鎌倉依
目谷ありを弘安二年の秋北条頼助寺院よりひき奉り共
此比へ引移一同年八月二日入佛供養を營一故今より至る迄此日を
以て縁日とて又是より寛元二年の夏國中大疫疾流行
人民死す者少からず経時頗小是を勸化奉尊より告て諸人の病



諸比
秋葉権現宮
み代世編祈社
社
丹楓
晩秋の夜
池
静
奇
景

寺島
蓮花寺
子堂



苦を消除せんとして懇々祈願と或夜奉る経時と靈示ありて秘蔵
 を賜ふ即此秘蔵より其頃病を退き命を全する者とて
 ありととるなり
今に至りては
 相傳の寛元四年丙午二月下旬北條經時疾に臨む其時舎才時頼
 を側へ招け示して云く我疾難治あり死後に至らば一宇の梵刹を創
 建し年頃念ふ所の聖徳太子の像を安置すべしといひ終つて同四月

朔日享年二十八歳小して逝去あり
東鑑云寛元四年丙午四月一日今日道元之位下
 行武藏守平朝臣經時卒と法名安樂年二十三
 とあり證 依時頼遺命を奉りて鎌倉依女谷一宇を創き蓮花寺
 と号す
經時の法号を蓮花寺殿前
 武列安樂大禪定門と号す
 即辦法印審範を以て住山とす
審範の
 深井法眼範智と係ありと云されと鎌倉
 大日記云良忠とありて云く經時と詳す

出離の志頻々忽小刺髪一弘安二年の秋鎌倉の蓮花寺に
 寺嶋小福一自居山たり
依りて大僧正頼助と号す
 鎌倉ありての心を以て
 頼助といふ号を載し傍に依りて注せり疑はらば

頼助の頼助の
頼助の頼助の

元亨三年北條家滅亡の後由後尊氏將軍及び官領基氏等崇教厚
田園等を附し御教書を賜ふ其後文明の頃下總の千葉兩郡と
別上り時歩や争戦止時あり兵火の災屢ありて當寺も大に荒廢
せり然も天文年間小田原北條家の領地となりて頃遠山丹波守
奉行として寺領等を寄附せし天正の後四海泰平に治りしより
更し寺産をより賜ふことあり

白鬚明神社 隅田河堤の下にあり祭神は猿田彦命あり祭禮は九月
十五日執行せし別當は真言宗なりて西藏院と号く相傳ふ天曆
五年辛未慈惠大師関東下向の頃靈示よごとて近江國志賀郡

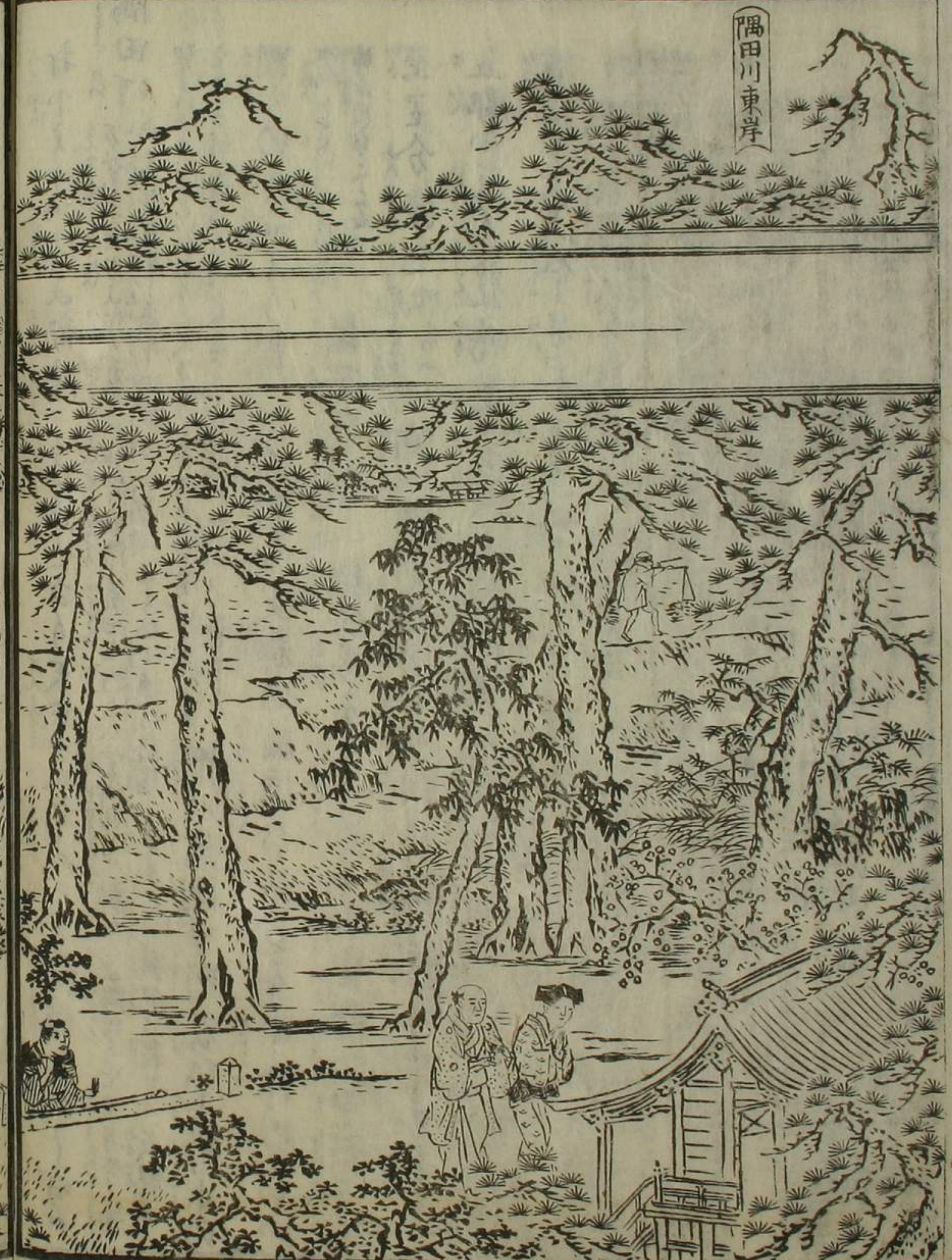
打下より此地を勸請しめあり天正十九年小至り神領を附しめ

隅田河 夫木抄古今集并抄市野國を以て徳の國界とて今の武藏國に属せり或説り
この河は古より名多し其の河は古より名多し
國々の山谷より發し武列秩父郡の諸流合し是を中津川と爲
此間を以て川名は分る 榛澤男衾二郡の界を東流し大里郡の中熊谷小
至り分流し之より一流は横見比企入間新坐
五郡小豆より豊嶋葛飾の両郡の中を流れて千住に至る末は淺
草川と爲り今是を以て隅田河と稱す 以上專説のいける所の説より
すり或入隅田河古の千股に流る今中川と發瀨川との間は横見たりて古隅田河と稱するあり
村の北の方より其間へは流れ今今川と爲れり今川と稱するあり隅田河は古より名多し
中川と爲りて今の淺草川に合はれ今今川と爲れり今川と稱するあり隅田河は古より名多し
あるは古よりあり既に根根川と爲れり今今川と爲れり今川と稱するあり隅田河は古より名多し
是も後或は古よりあり既に根根川と爲れり今今川と爲れり今川と稱するあり隅田河は古より名多し
按は菅原孝標の女の更科の記は武蔵と相摸の中ありて中津川と稱するあり隅田河は古より名多し
今更科の記は武蔵と相摸の中ありて中津川と稱するあり隅田河は古より名多し
記は武蔵と相摸の中ありて中津川と稱するあり隅田河は古より名多し
記は武蔵と相摸の中ありて中津川と稱するあり隅田河は古より名多し

白岩明神社



隅田川東岸



追討の大勢とく左瀨門佐平直方右兵衛佐中原成道等朝探り
應一ニ萬二千余騎より發向と忠常其身千葉の城に楯籠舎
陸奥権女忠頼を大勢とく其勢二萬余騎を率へてすここの
南陣を取同十五日官軍成道の舎才伊勢成俊直方の子
息阿多見四郎聖範共々勢を合せて先登り方々戦ふ故先陣の
大頼致走とされと忠常も残兵一萬五千余騎に駈られ官軍の
後陣ありあり直方も成道の落着きと推せり且んあらと引
返り後軍の兵卒を集んとて隅田河原に陣を取と云

東鑑曰 治承四年庚子十月二日辛巳武衛相兼
于常胤廣常等之舟楫濟木井隅田河精兵及三
萬餘騎赴武藏國豊嶋權弁清光葛西三郎清重等
最前泰上又足立右馬允遠元兼日依受命爲御迎
泰向云云

北條九代記小文治五年七月十九日頼朝と與別義衛追伐の首途
あつと云条下千葉必常胤八田右瀨門尉知家八東海道の大勢と

と常陸中總兩國の勢を率へて宇方行方を逐て若碓より隅田
川の湊より渡りて邊下畧

隅田河原 隅田河原をぬれ

隅田河原 深堀橋より一歩り然谷に至る行程凡拾六里是を然谷堤と
云天正二年小田原北条氏これを荒れたりといひ

官府の命ありて三圍編芥の辺より本母寺の隙近堤の左右桃梅柳の
三樹を殖させられ三月の末より孫生の末より紅紫翠白枝を
交へられ錦鏽を晒さる如く幽艶賞するに堪はらずと董菜碎
米菜盛りの頃池上は花壇を敷く如く一時の壯觀なり

隅田宿 竹れの池をのりて今あるへからむと往古の興別街道の釋舎
あるへ東鑑に治承四年庚子十月二日頼朝と右井隅田の両河を渡ら
るるとの事あり今日武衛の御乳母故八田武者宗綱の息女

夫本集

西之佐

御當家より

小山野大塚

陽田川渡

陽田川東岸

初花

くみらそ

くみらそ

くみらそ

すま

河原の

まき

とひ

まき

冷泉
宿久々



荒波根の

あまき

あまき

春風

すま

河原の

まき

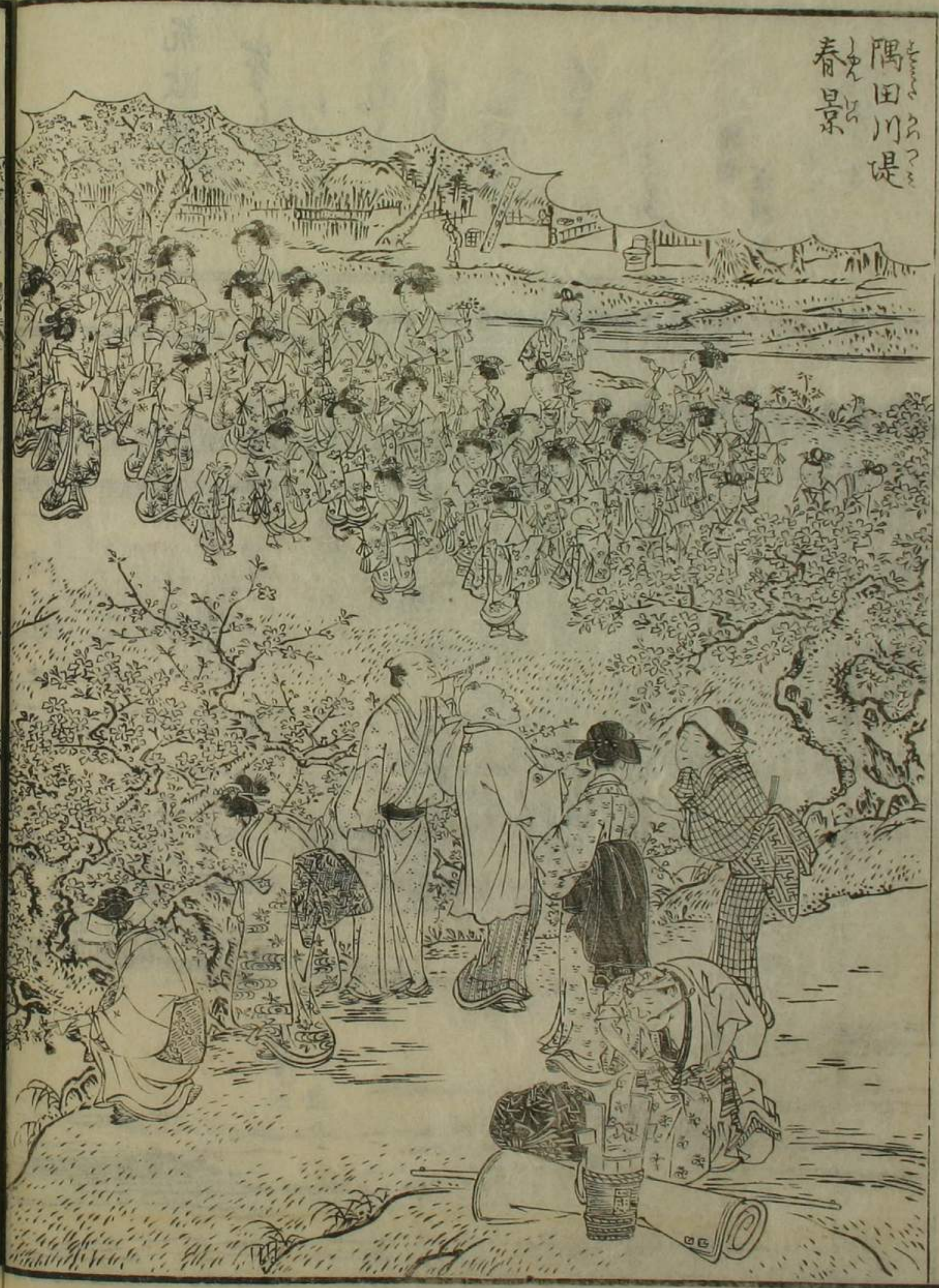
くみらそ

冷泉
宿村々



梅場
の
渡
口

隅田川堤
春景



隅田川の堤をとうらふ人々の
 青柳の枝髪も緑の眉
 みやひさしくうれしけれ
 花のちころひそめさ
 えまひはくらくらみえんと
 えまひはくらくらみえんと
 えまひはくらくらみえんと
 えまひはくらくらみえんと
 ひこえらしたる挿頭もや
 ちゆ折らんとささけう小川の
 とまふる木の幸
 ありあけら

本母寺
梅若塚
水神宮
若宮八幡

隅田川東岸

本母寺

水

會

月の

其角

田園雜記

今頃の塚の
すゝめりた
今頃の塚に
あつて

古塚の

うけ行の

すゝめり

すゝめり

ねん

袖

道真准后



梅若丸と申すの
 比叡の月林寺を
 のれど花洛北
 白川のあはれ人
 とて呼んで大津の
 浦よりなる
 奥陸の信夫の妻を
 とらる人むねひとの
 ためとてうあむ
 くれとてうあむ
 隅田川よまぬ
 こころのつらさ
 詳あり



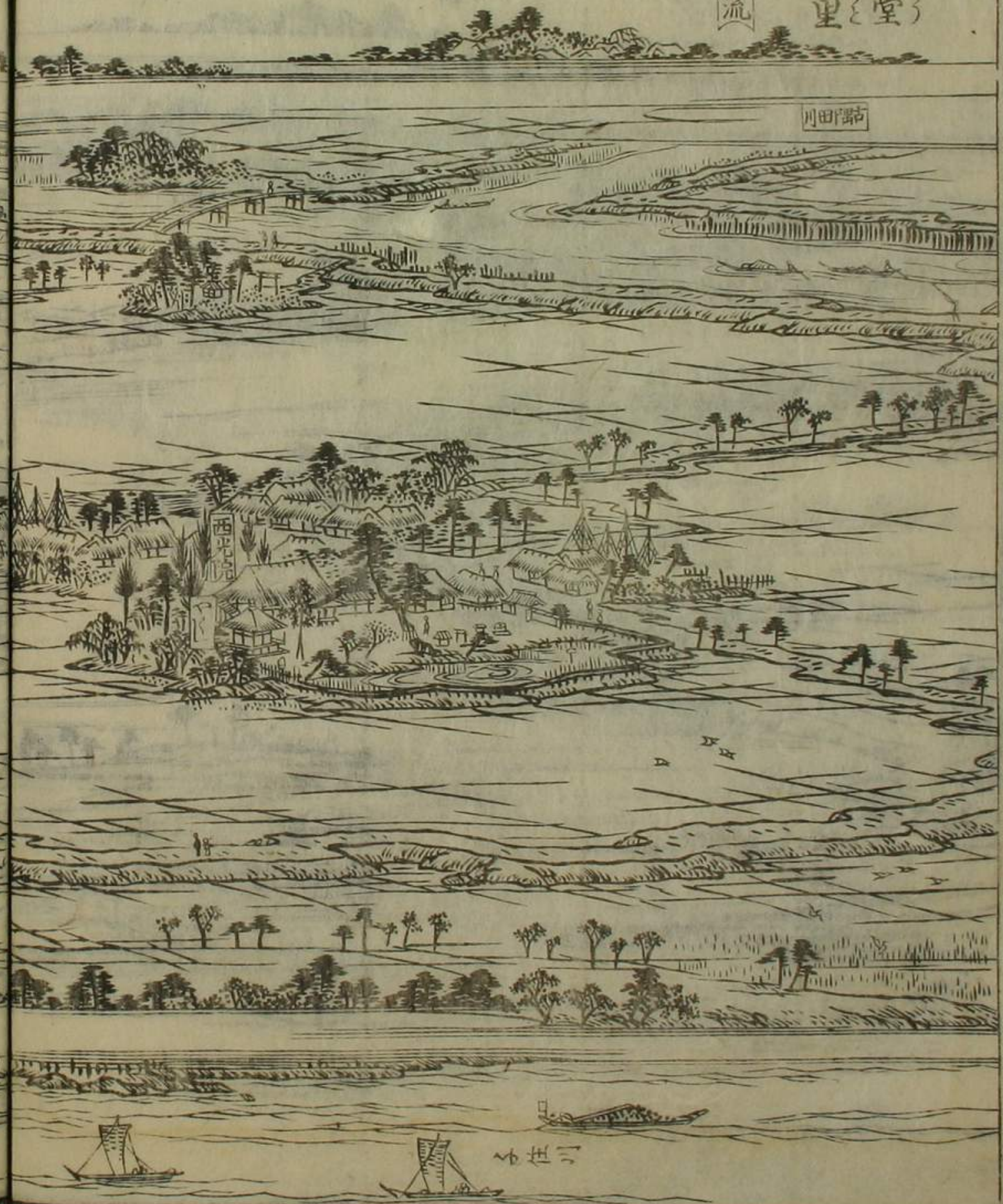
園一云人買は藤を
 陸奥南波の産
 ありとて今も南
 波の人其怨靈
 あるを忌む
 今至るると夫は
 羽田の村に居る
 人なりて
 活るる如し

夫本掛
庵崎の
しん
い系
月いれぬ
冥心
里
光俊



二其

牛田
薬師堂
関屋
隅田川上流



天満宮
天満宮



三其

鐘の潭

同河隅田河荒川後瀬川の二俣の石をさうて名は

沈没せりとも又橋場長昌寺の鐘ありともいひ今西寺に存する石の

新鑄の鐘の銘も此の石を載たし何れ是ららん

持て持てと名を此の石の五徳巖といふありしを往昔普門院(隅田河

三勝の山中ありしと云ふ和二年位拍栗真地をゆきし寺を今の龜戸村に移せり

其頃あるまじく無鯨を中と投てと土俗伝へ橋場法源寺の鐘とするの誤り

牛田薬師堂

本母寺より二四丁北の方牛田村の石を真言宗より子葉

山西光院と号く徳治二年丁未當國の領主子葉氏の草創開山を

覺音法印といふ本寺溜瀧光如來の弘法大師の作りし子葉女常

胤崇尊の靈像ありと云傳へて靈驗著し

相傳へ子葉女常胤のなき喬又同五郎胤朝といふ者あり下徳國香取

郡石出といふ地は居住し石出日向守と唱ふ

其末流冷雪入道吉深に至りて此牛田村に流れ住竟莊園の地を

隱栖

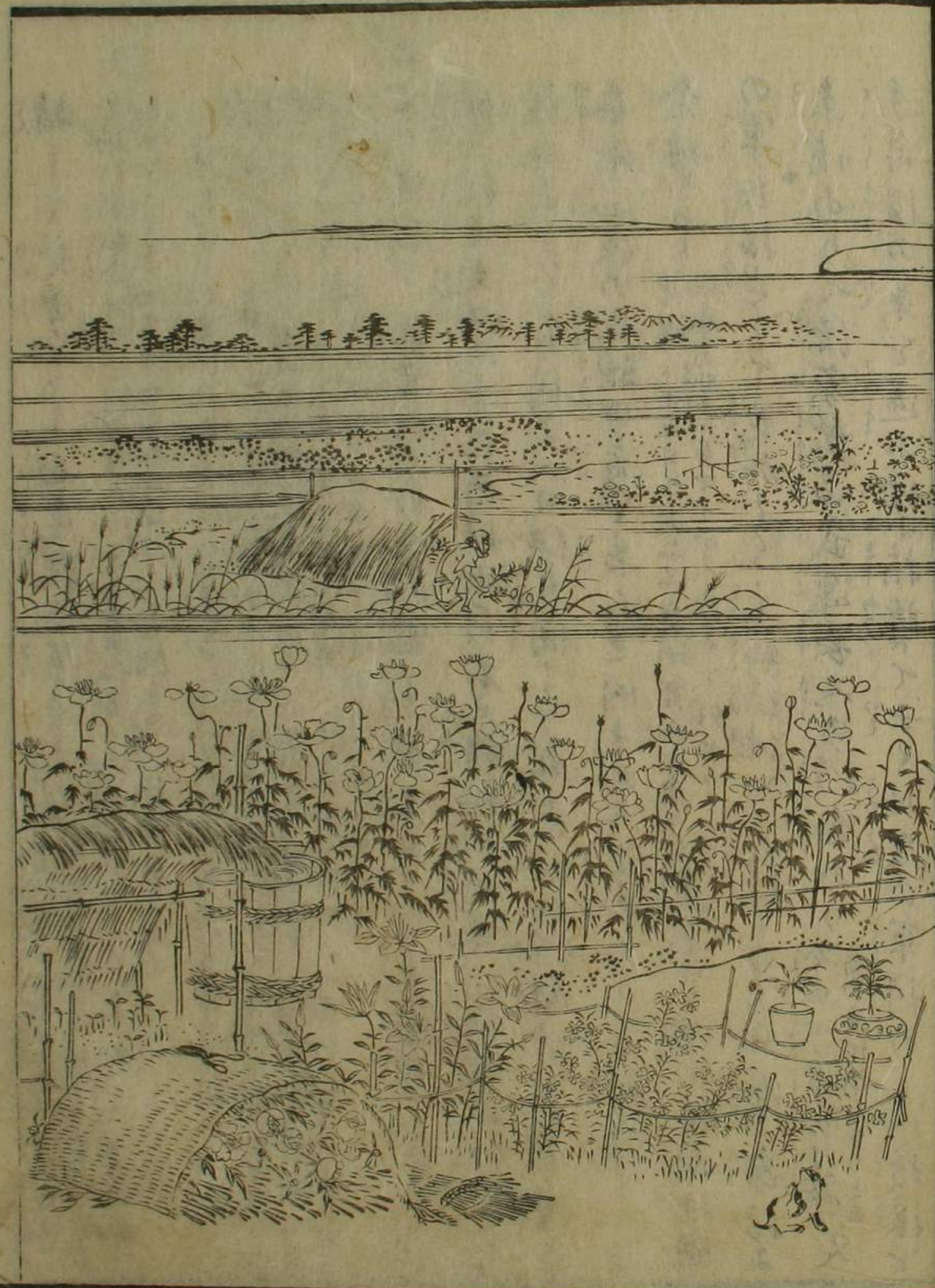
此牛田村の胤朝子葉の地あり永和二年入道と号し

此牛田村の胤朝子葉の地あり永和二年入道と号し

此牛田村の胤朝子葉の地あり永和二年入道と号し

此牛田村の胤朝子葉の地あり永和二年入道と号し

此牛田村の胤朝子葉の地あり永和二年入道と号し



轉して梵宇とて西光院と号くとて古始小田原の寺なり後悉く
中道家の名に應じて食録三百石
を賜ひ勅獄令の官士に命せしむるに實二原く才大なりてりより
國師の學法好む
私にせしむる延宝中牛田村に隱栖しを軒と号く和あり云く

予たねをいふありて宋の戸も月もひり花もありあり常好
戸麻子といふ冊子といひて戸麻子といふ字者半信を好むり又連師の中も
加へり人の源氏物語の御解七十卷をいひて名つけを疑ふとて元禄二年己未三月
享保七年己未四月辛未を葬と清原の若慶寺にいひて同日辛未を葬と清原の若慶寺に
いひて同日辛未を葬と清原の若慶寺にいひて同日辛未を葬と清原の若慶寺に

若宮八幡宮

若宮村あり別當は言宗ありて善福寺と号す社

傳云姓古文治六年己酉秋七月右大臣將頼朝卿奥州奉衡征伐して

發向ありて同日伊豆國より專光坊の阿闍梨とて潛し

奉衡征伐の立願の旨と告らる同日十九日途出ありて勢饒一子

余騎ありて源家繁昌武運長久之の祈念あり今の本道の道徳
昔の奥州街なりと云

手自撰の策と逆小地小指禁て云く此度の軍利ありハ枝根と

て榮少へとて其根は樹なりとて
今ハ存せず竟小奥州と治之凱陣あり

乃其後鶴岡若宮八幡宮と勅請を此地の葛西三郎清重乃

領地たふふり清重命して社頭と經營せり又神田等代

寄附せり其後年代遠く隔るる障霧ハ軒と侵し淫雨

を靡と洗ひ春草年々お生れ秋の葛月く小茂を瑞籬ハ崩ま

神措朽て破壊おあひひとて天正の後 台命ふり伊奈

備前守再興ありより重初と朱の玉籬光と彰り

夫も又昔より今ハ古松老杉矯々として寥々として社頭

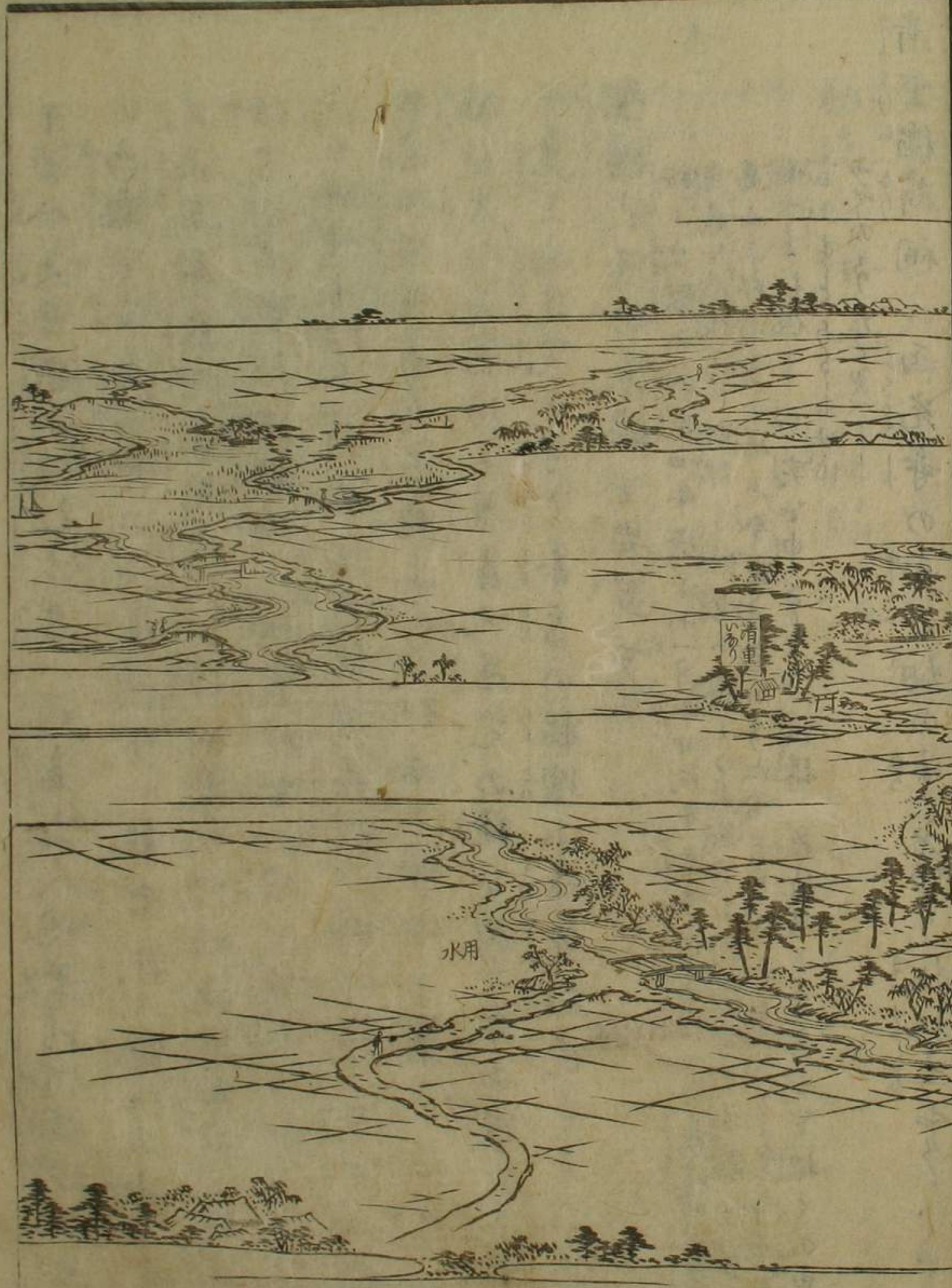
とて

法華經一部一卷 其又漸く守よりありて巻くる圍りあり指渡ハ九分

甚奇吉あり寺僧の流し頼朝屋の新袖ありといひつて筆者ハ文覚ありと

超越山西光寺 浩江村ありり小田原北条家の古文書ハ山中内内命
所領ハ浩江の地名と注し加へり 往古ハ

淨土宗の寺院あり葛西三郎清重 権頭清光の子あり 閑基たり

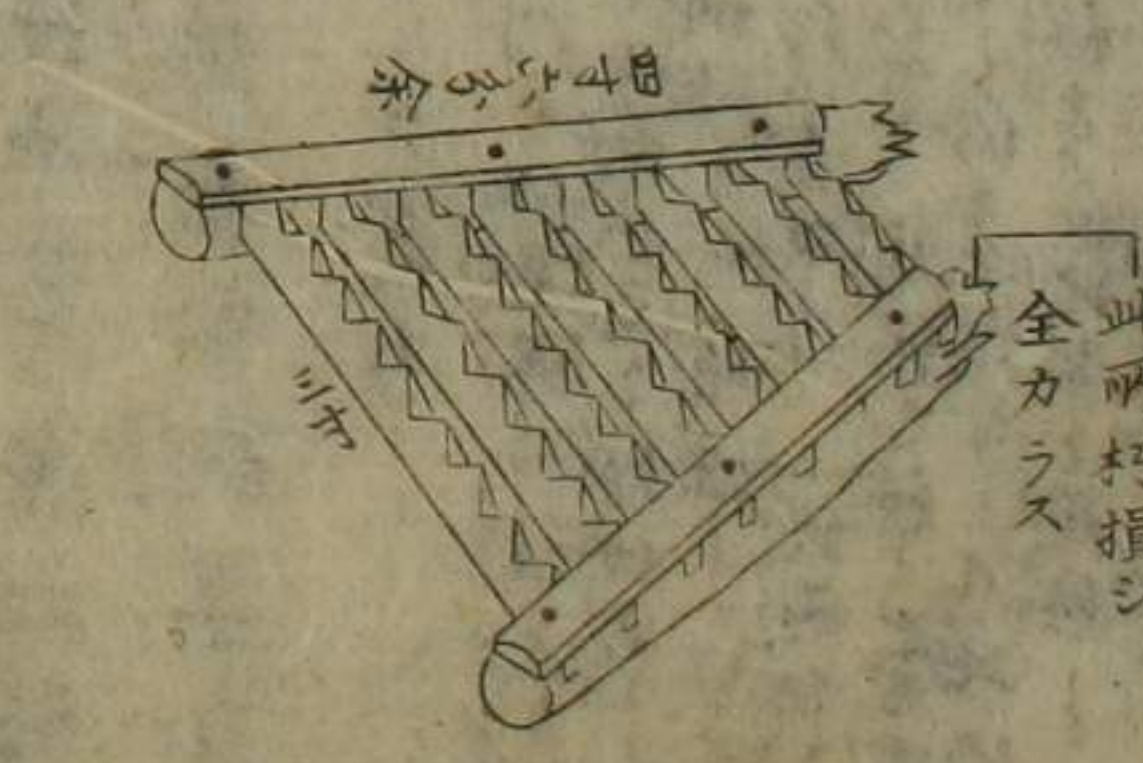
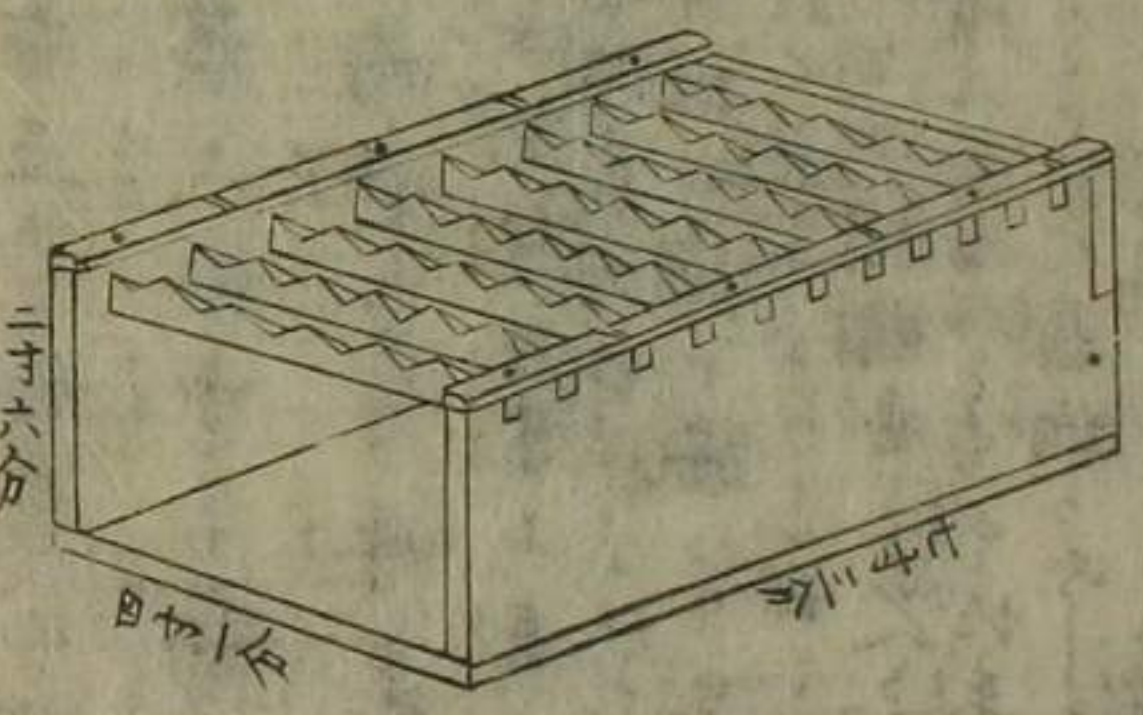


淡江
西光寺
清重稻荷



奉るの土人此番と青砥と云ふ工夫ありと云ふれども其可成ハ論まあり
 たり今も此川辺の農家は是と用ゆるものあり其因左のこと

全形図のこく杉とてりつ
 製を竹の厚さの鋸の齒乃
 こく杉とてりつと横の板へ切
 る横板の上より同く竹の
 縁と打付て動くぬすりふり
 くる物なり或人乃説り
 昔蒲草よかかひのよとき
 紋あると俗よわさひあつと
 りも此番の形と借てりひ
 出せりゆんとはあつらん軟
 又下は同まる物も製大方
 同形して形も異なり



木下川薬師堂 木下川村あり 土人キ子北と唱ふ或ハ作依と又龜毛川
 あり文字木毛川よ作り 青龍山浄光寺薬王院と号す天台宗

本堂 本尊薬師如來 傳教大師の作照土日月十二神將の
 白鬚明神祠 堂前左の方あり廣智達舟のの習習とまらる来由 本尊縁起の条下り 詳あり
 本地不動明王の像 慈覚大師の作垂迹の安老翁の木像中々荒本作りを異相あり

天照太神宮 神射 兩室童子ゆへ本地弥陀 山王権現宮 神射 一塊の灵石
 如來なりむり此三神は往古より此地の守護なりと云ふ
 合せて一社とて此三神は往古より此地の守護なりと云ふ
 中射あり護物藍神と稱して古慈覚大師淺草寺の觀音へ奉納の時瑞雲青龍本方
 現して此三神と稱して古慈覚大師淺草寺の觀音へ奉納の時瑞雲青龍本方
 大師の作の塑像と 熊野権現祠 同大師の前あり昔千葉公常御殿の神告書に
 安置ありしなり 西親世音十一面觀世音の三尊と流治の像あり此地に動請一印子やて
 のの散失しりより 遙の後弥陀の像を此地の土中より掘出しり

東照大権現宮 神影 生昔慈眼大師曰く
 神祖御本地薬師如來なり當寺も又如來靈應の地なり
 我幸に手持する所の畫影と寄附まへりて親ら點眼供養しりてまつり神像乃
 上自筆ととり題して曰く

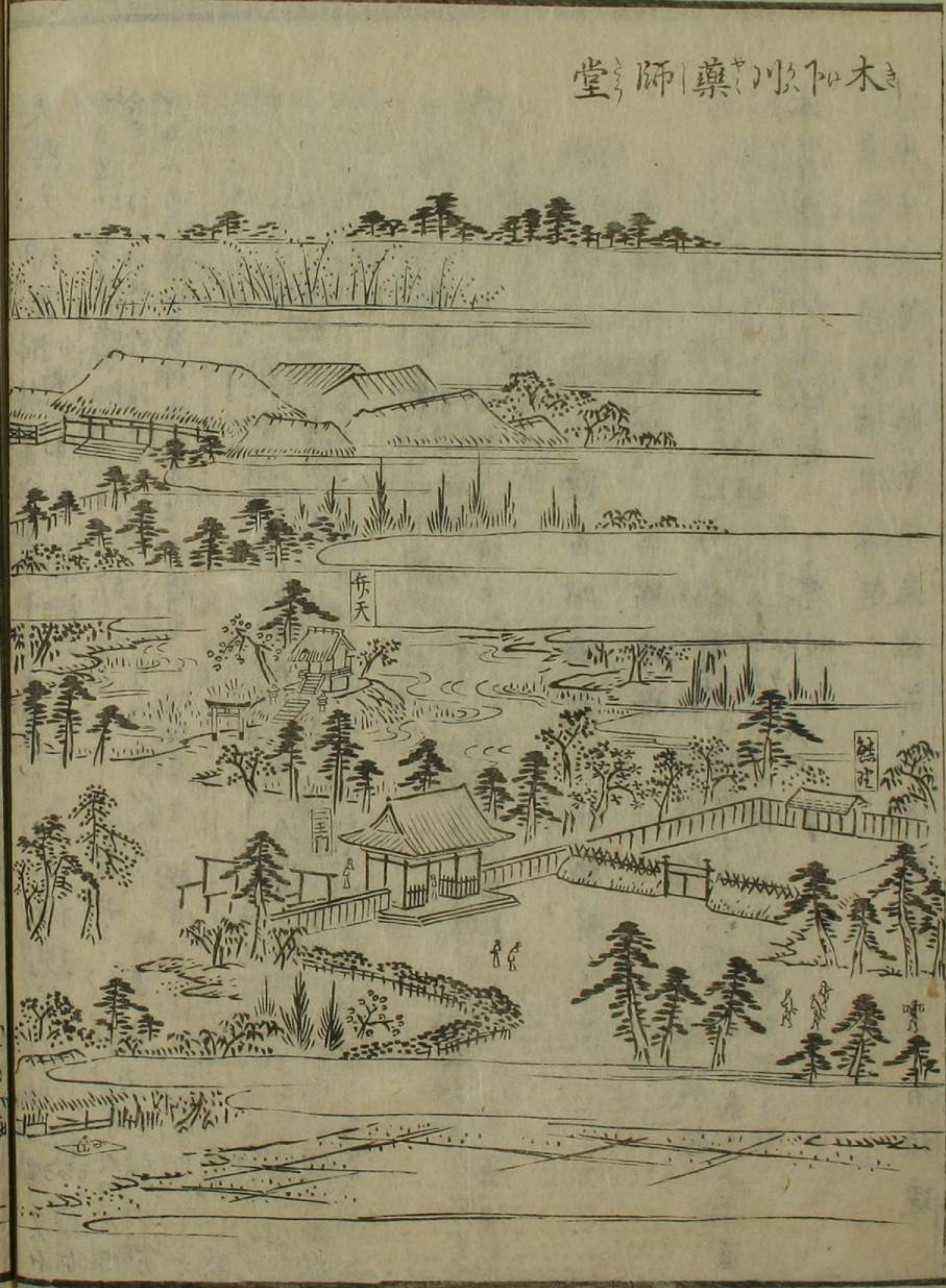
歸命満月海 淨名瑠璃光 法樂救人天
 因中十二願 東照大権現 三國傳燈 行探題 天海開眼
 本尊薬師如來縁起 一卷 如一文の

青龍山薬師佛像縁起 原夫佛像者優填王慕佛而刻像初焉伽藍者須達
 かのてし讚と添ふ其時の住僧某は附屬あり今猶其人を敬拜せしむ
 本尊薬師如來縁起 一卷 如一文の

江戸名所記
 八日おろひひ
 元三の朝
 二かす本尊
 の清前
 あくは
 人
 され
 絶
 あ



木下川薬師堂



當不時官知語等力等曰宿山龍龍雲尋出靈留傳去識果汝恩思
寺動放吏識唱言營獻今草以不能告青臨像淺被村必汝等而建
居院光及來翁是之供夜庵青動加青龍東彼草現里來等若還伽
既之覺富而之我此耳夢漸龍垂護龍到北像寺益道此暫能爾藍
而像大民建亥之地覺或至至頭之曰庵忽傳一者俗營合至後如
告是師等寺曰願伐大人清今而莫吾所然教日多目練心心翁何
村也思傾於翁也木師告旦時聞令有拜起大有矣送若護歸語答
人此必財此聖師交告曰里時言不一佛瑞師白其天吾此請村曰
曰時靈戮聖者能荆村貴人有己祥言像雲所髮後際若此必民時
堂覺材力語也企新人人數龍龍自神而青造翁慈追遲地有曰緣
字大自于不翁造為曰寓輩燈形今龍青龍也來覺共歸亦感過未
未師刻時虛欲營靈我草捧奇隱以聞龍現言曰大深傳好應日熟
成或不庵師去我場欲庵珍瑞覺神之猶雲已東師信吾建也吾汝
雖時動中其告等則建子膳者大龍吾現中形北東誓語練我已且
然在明有人衆誓不寺等而其師為欲在覺隱有方首語若有得還
吾淺王尺也曰努亦於盍至此為護建覺大慈靈行自畢後西安去
志草像餘於後力空此餉問謂吉伽寺大師覺地化是凌時州靈於
在寺今靈此時村乎汝焉其乎徵藍於師潛大吾之靈空有之像是
弘或堂木合有人村等故故其即神此向出師安時感而善行自智
通時西時郡善亦人合我對夜名青神瑞寺便置暫溢西知未今止

紛無則附居謂翁髮是東靈何智是天像大我像之故尊乘佛無布
亂人下之處此曰白何還應處而日明腰師當告日再是止像量金
奇家總耶所翁我如常到之耶語欲此見曰行曰佛刻也觀者之祇
香唯國於以容待雪唱武地大夢還時今像也如像藥其院傳生園
薰有郡是然儀像容佛州也師事野下不已大汝已師後自教也始
郁一今乎者心者眼名偶汝對智州野拜靈師所成佛大刻大肆焉
智草之翁我非久麋居然夫曰感告國像異俄念但像師等師下爾
喜庵地與奉常矣素在逢隨信喜別大腰不覺我未今思身所總來
而于也智特人汝而葛一佛知而耳慈者煩時欲琢青念藥造國佛
附時四及佛故所氣飾老意佛問大寺蓋復四利彫龍彫師也葛像
像此望從像對負象郡翁廣意曰師有由彫更益像山刻佛初飾伽
於地瞻者者曰佛超木其智非然默釋之乃也東腰之一像延郡藍
翁震眺東正願像凡下名曰凡則然廣也止便國其本佛安曆青徧
而動唯入是我當相川唱諾所生而智而因起之夜尊像置七龍滿
智紫見荒生欲安見野翁謹測身知者大之拜衆大是當之年山三
問雲茂原身一我欣年不隨只佛佛來師自像生師也化今於淨千
曰降草行佛見草然可知佛東也意在不以感明夢大益中叡光之
我垂曠數也老庵傾九其意州不附獻知錦歎且所師東堂山寺界
此瑞野里豈翁智慰十姓因自知於山便綉恭有刻彫國之創藥利
地花曾至輕之思唱鬚字負有安廣至到纏敬便佛刺以本一師益

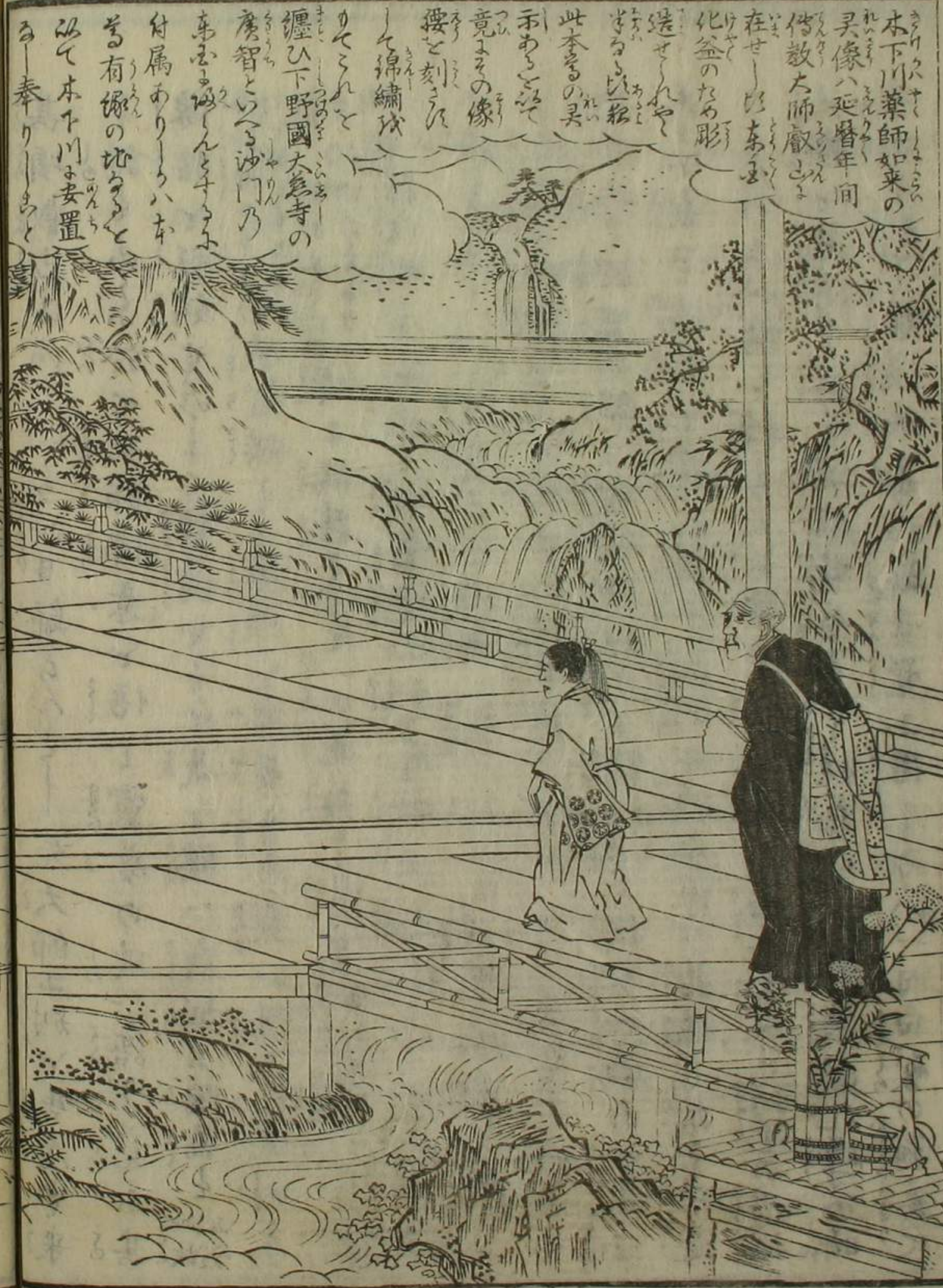
所期未得此久停明日當去他日再告
顯密之教三其志積萬年觀直忽然明淨或近佛樓營
至真觀一如其人志積萬年觀直忽然明淨或近佛樓營
造營有成一如其人志積萬年觀直忽然明淨或近佛樓營
視道俗有五日有光或佛出見大像或綠遠徧樓營
色起見僧或全不徹到者其小佛未一見大像或綠遠徧樓營
重罪至善友教使見者懺悔或燒煉指生刺血多朝麗造或
地聞其瑞應賜田數百畝永充供馬之後二源乎僧朝麗造或
都自刻是也光表十是鎮願置佛之前徒合善信十
二十名曰淨變懼其實是本護國之二馬今二源乎僧朝麗造或
叙院遷世懼其實是本護國之二馬今二源乎僧朝麗造或
嘉曆二年六月十五日住持沙門義純謹書
無十薩僧朝麗造或

本尊緣起曰延曆年間傳教大師東國化益の爲觀心小於
藥師佛と彫刻を漸多の頃一夜此像大師の爰告て曰く
汝ら念ふ所の如く我東國の衆生と利益せんは明旦便あり
我心より大師覺ぬ然る明旦下野國大慈寺の廣智

其頃觀心小於此日歸らんと先大師別と告んを來
了謁をある於て大師佛意と悟り靈夢の瑞と語り竟ふ其
像腰と彫刻せしめて錦綉とめて是と纏ひ廣智の附屬を
佛拈蓮小半より廣智諾して佛像と脊負まり東に還り武州
上野國の今の本下川の時は偶然とて一の老翁小逢へて
到る翁欣然とて云く我靈像の到るを待り久しやうく我茶庵
明神翁欣然とて云く我靈像の到るを待り久しやうく我茶庵
小安まへと云智喜んで彼像と翁は附り又此地に伽藍と建ひ
と告翁云時縁の事と熟せし汝且還り去る依て廣智を此と
思ひ止り郷里小歸る爾後翁村民小語て云く後善知識ありて必
あふ小來り結若と當ん我今西州小引り若歸り來る遅
うんあふ此語と傳へて云畢り空と凌ぐ西に去まり村里の道俗
天際と見送る共々深信誓首を重後慈覺大師東國化導の時
武州小到り暫淺草寺の觀音堂小留り一日白髮の翁來て



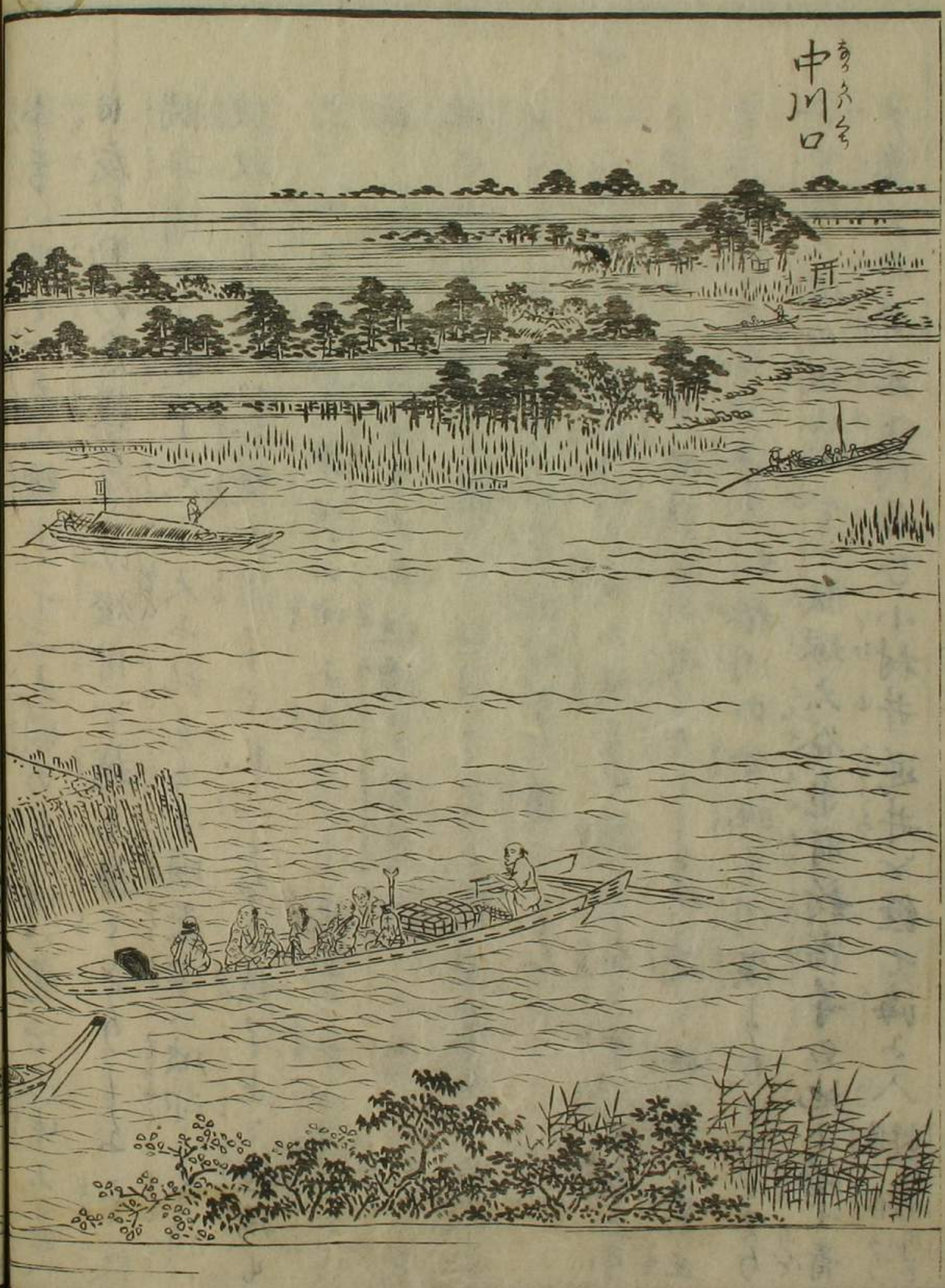
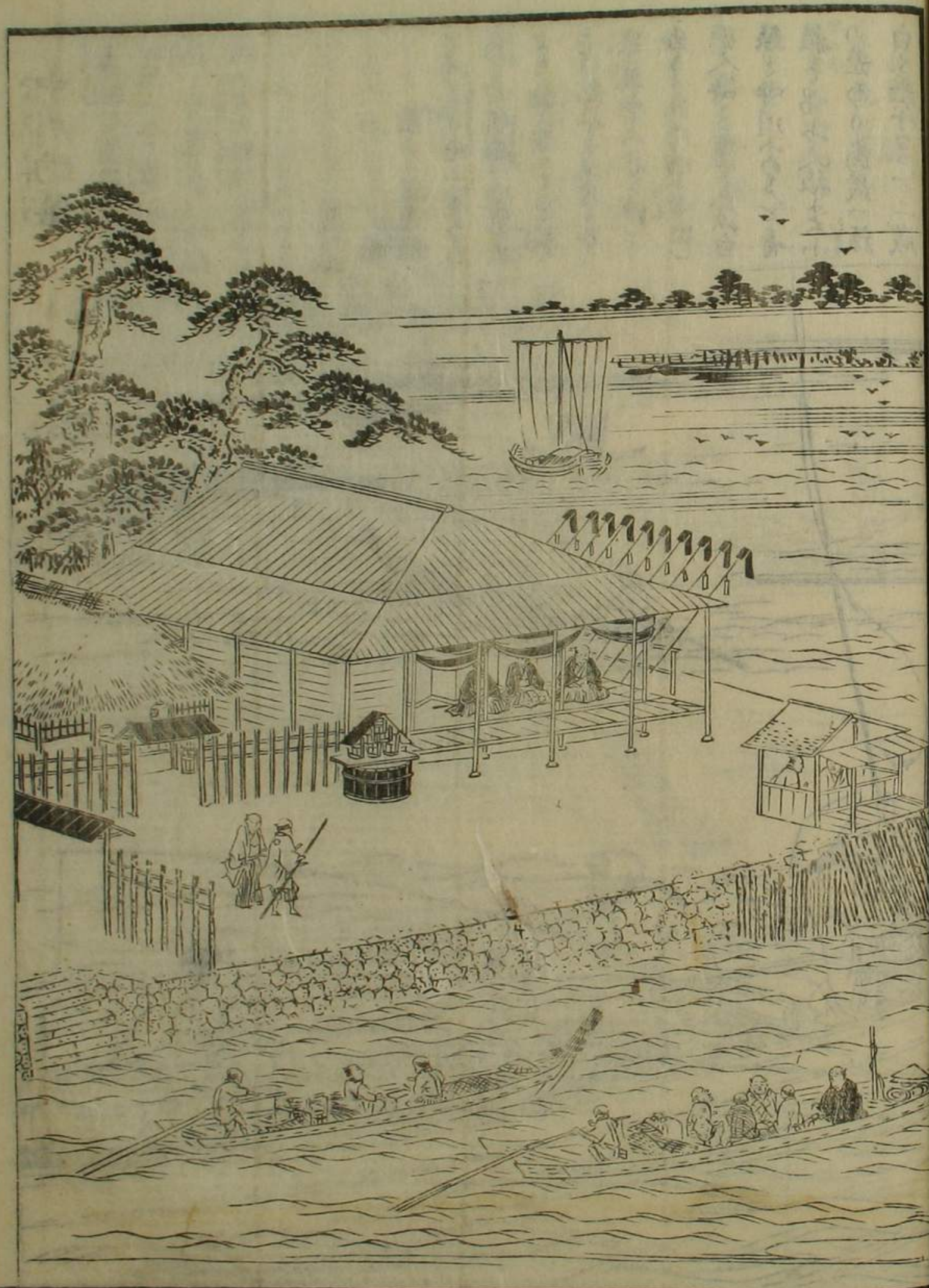
浄光寺縁起
 詳あり



本下川薬師如来の
 灵像八延曆年間
 僧教大師獻
 在せし形
 化釜の形
 造せしや
 此本尊の灵
 示ありて
 竟まその像
 授け刻
 綿繡
 りて
 纏ひ下野國大倉寺の
 唐智といふ沙門乃
 東山に
 付属ありしハ本
 尊有像の地
 必く本下川に安置
 る奉り

大師小告て云く此所より東北に靈地あり藥師乃靈像以
安まるといひ畢て後其方と失ふ大師東北と望ふ忽然として
瑞雲起り中小青龍現を依て奇異の思ひを以て潜小寺と名
を元小を果して藥師佛の靈像あり此時村人等集り來り
前の唱翁言と告大師とて其人ありと稱し終に合郡官吏
及び富民等財を傾けく寺院と建せんとす則弟子慶寛は
此地と附屬ありし慶寛堂構の志と勵し貞觀二年の春に
至り諸堂落成を以て於て慈覺大師と同山と稱し法古乃
瑞小因く山と青龍と号す朝廷其瑞應と聞かひ田園百畝
を賜ひ永寺供に充て後惠心僧都二脇士及び十二神將の
像を彫刻ありて佛前不安せし又慶寛十二大願と表して
十二の衆徒と置十二院と合せて淨光寺と号するあり
當寺の草創より已降九百四十有餘年を経る古刹あり

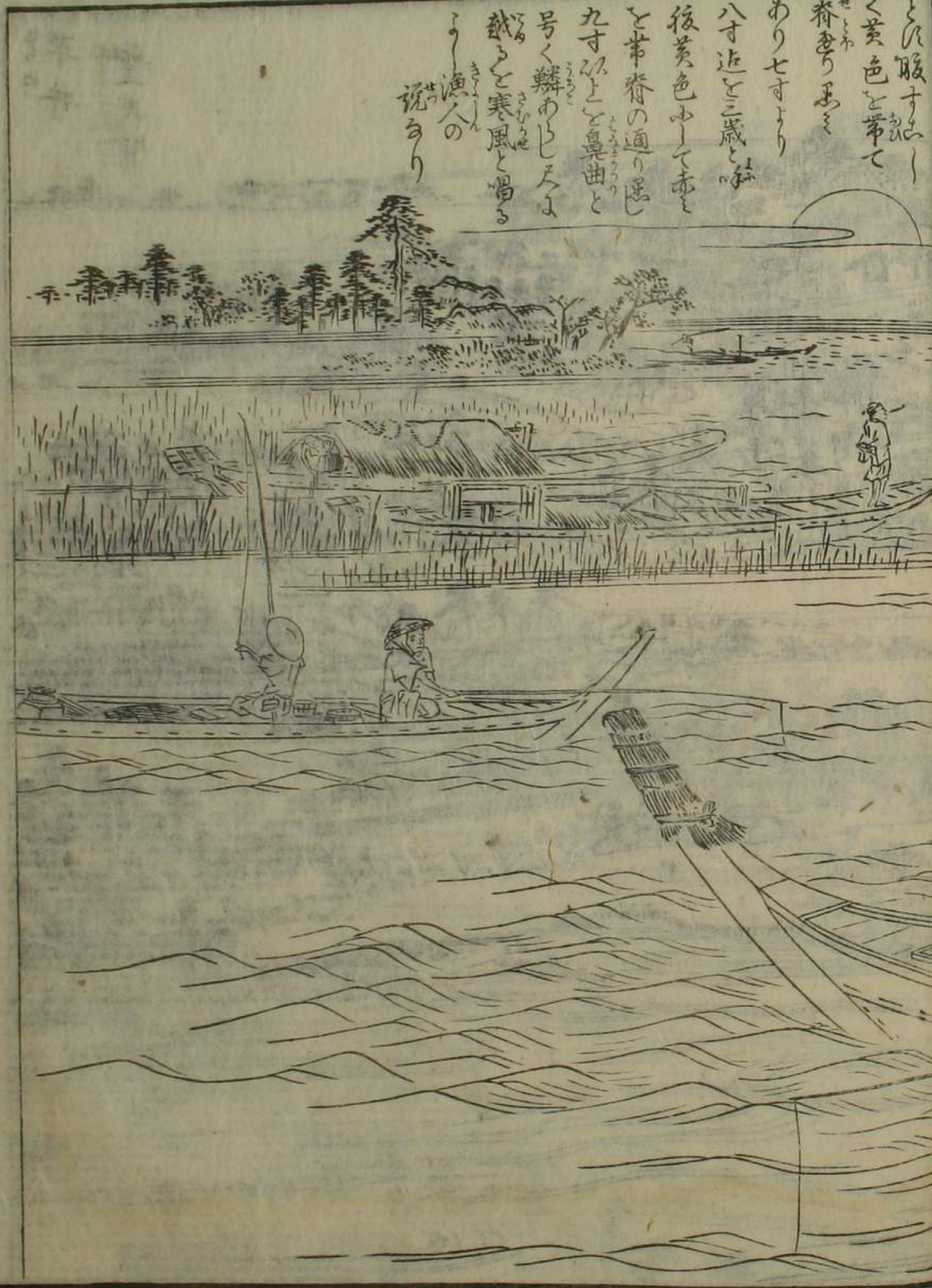
本号の光と一天小耀し十二大願の衆徒の薨と山中に
日夜の勤行怠慢を法燈月と越く赫々として
鬪争國々不起り天下大亂まらば頃堂宇の破却し寺願の
没收せしまた兵燹に罹りて焦土となり残る止る住僧も
なく唯本号の草堂の中にお在せし天正の末四海昌平に
歸りなり後同十九年住僧良完慈許して竟に茶師堂
願の朱章と揚りて著しあり
念ふに本号の靈驗いよ著しあり
中川 隅田川と利根川の間に夾きて流るる中川の号あり
とて荒川の分流熊谷の辺りよりして遠く埼玉と足立
と北兩郡の合と流るる利根川の分流も川俣よりして
二水猿俣の辺り合し版塚大谷龜有新宿等の地に添て青
戸奥戸平井本下川及び小村井逆井と經て海に入

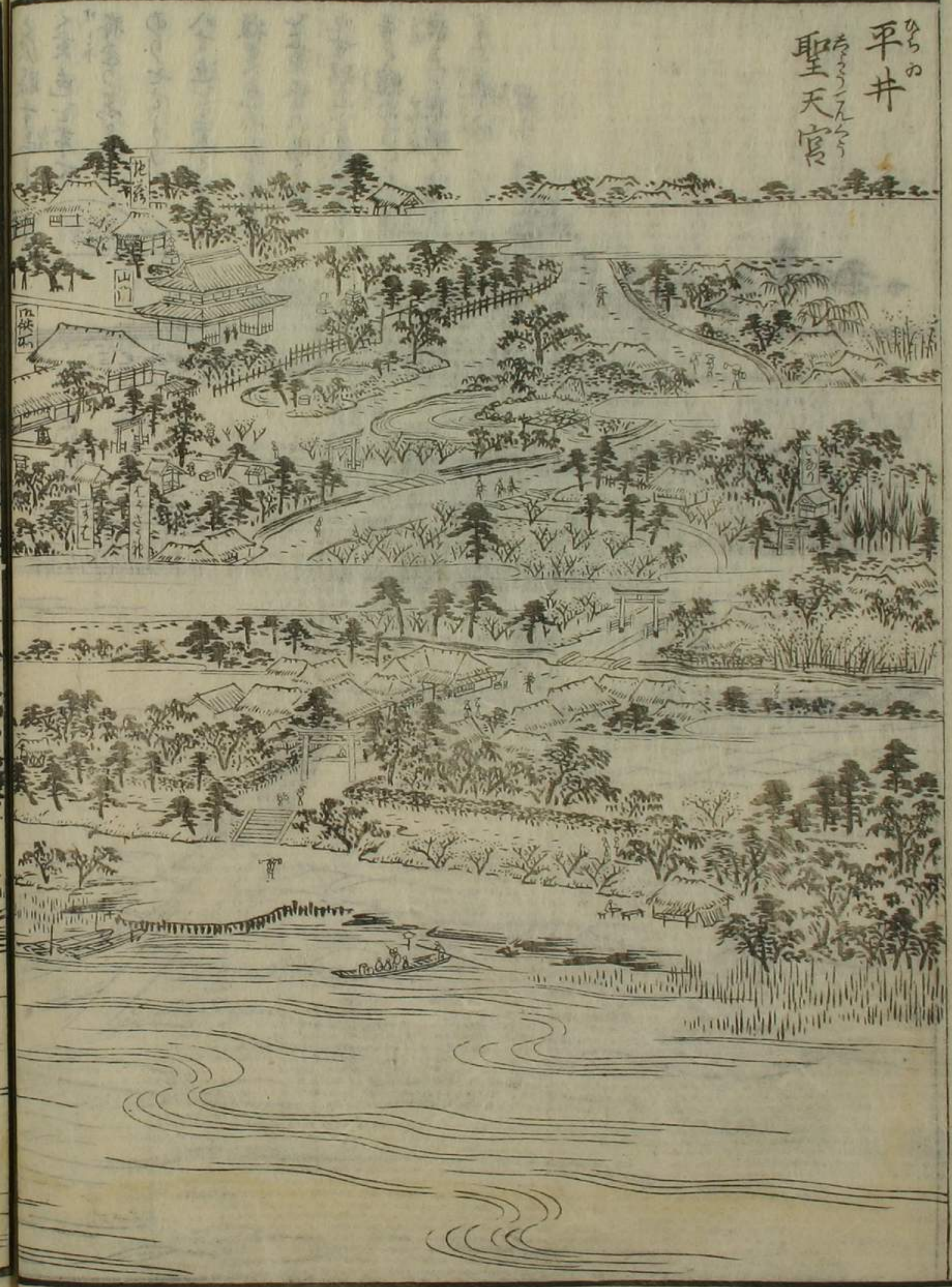


中川釣鱧

春鱧、三月の末より
四月小入と登り春
約と云、寛文のは南総
伍大力の船頭仁喜海と
て、あつた岩崎六をまて
ゆゑ人は能く岩崎流
との六則は入子始
りて、是より後春鱧
と釣る事世に盛なり
と云、秋鱧、八月の末
より九月までと前
と云、然れども十月より
寒氣すつたれを伴ひ
出ると、中川釣は幸は
漁人海を産す、淡白
鱧と呼川小あると青
鱧と唱ふ、又鱧は大小
の差あり、高歳は後
白く五六寸と二歳

と云、暖す
く黄色を帯て
脊をりあき
あり七寸より
八寸迄と三歳と
後、黄色より赤
と、背脊の通り、
九寸以上と、真曲と
号く鱧のし、
秋と、寒風と、
漁人の
説き





水戸黄門光圀水府入封の頃此中川乃
中川と命せしむるなり

中川やほろひてはせむらひ

嵐雪

立石 立石村五方山南藏院とて真言宗の寺境あり地

上へ頭まゝ不終又壹尺まゝあり土人相傳へて石根地

中不入其際とてまゝあり石質弱少て色世間

小粒まゝ鞍馬石小似たり此石寒氣と帯まはるか

損まゝも春暖の氣と得る時ハ又元の如くと云る

近々四五箇村の名を立石とて分々とあり

熊野権現祠 同境内良の隅あり今日地と失ふは鎮座乃

年歴等と詳ふせむとて神躰ハ一箇の靈石也

社及び多摩郡阿佐り谷神明等の神躰乃靈石何をも

其形相似

按神書皇孫の降り時諸部の神の佩せし頭進劍あり

日照山普賢寺 上千葉村あり新義真言宗也

如来ハ佛工春日の作なり弘安年間法空阿闍梨開基に

魏々々々廣大なり此近ハ普賢寺村と号する

地名あり當寺食邑の旧跡あり

境内ハ葛西六郎と

人の墳墓あり

按葛西三郎清重の氏族なり東鑑建曆三年癸酉五月三日和田左衛門

尉義盛共と起し將軍家及び執權義時の本とて茶下に葛西

六郎とて名を以て武藏國の住人と注せり

真光山善通寺 逆井渡口より八九町東の方東小松川村より

一向宗西本願寺に属せり本尊阿彌陀如来ハ来迎の像あり

相傳ハ往古千葉介太郎宗胤の守本尊あり

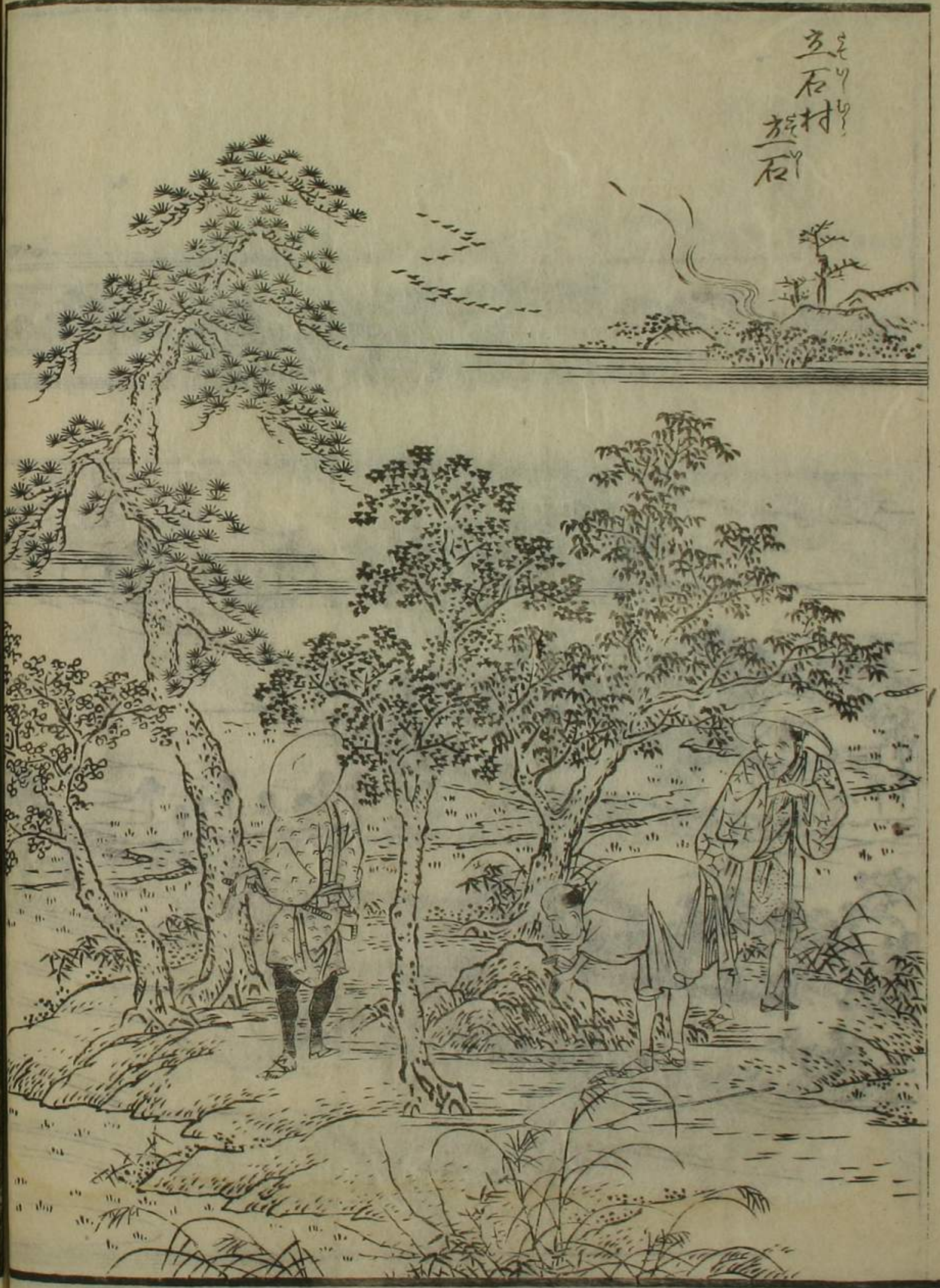
宗胤没落の後家臣秋元刑部左衛門尉胤次と云者是を傳へる歳

立石
南蔵院
熊野祠



中川

石村
石



月と歴より後親鸞上人亂次り家小止宿せらるる頃
 亂次上人の宗化小歸一室と營此本多と安す然
 永正年間兵火小羅堂宇悉く焦土とありしうと本そ
 持退て恙勿とあり天下承平の時小終一室と闢
 善通寺と号くといふ
 阿弥陀如来画像一幅秋元刑部左衛門の子孫今も此村の中二四有
 中將姫製まう本といふ物地之竊の縁ありて都首の
 八月より同十日迄此像と掛と諸人よおせむ注古
 十字名號一幅此像上人の眞筆あり昔上人亂次り家小宿まひり夜
 職難不途ととも威威のありて失りてあり
 醫王山妙音寺 東一江村小り真言宗ありて建久元年秀榮
 上人開創する所の精舎あり阿弥陀如来と本尊と此高寺小安置
 の茶師如来の立像ありて佛工春日の彫造ありと云傳人姓古敏也
 安房守某の人の念持佛ありて靈威の尊像ありと云辨成天
 此宮ハ堂前池の中島ありて寺記小寶治元年丁未勅請と云

實頭盧尊者像

堂中小安置を寺僧侍へて
佛工春日の作ありといへり
言さ一尺ありわり荒木造り
あてて容貌甚異相あり



本覚山妙勝寺 西二の江村古川の通りあり日蓮宗にして中山

の一鴈寺葛西の觸頭あり 弘安年間 或ハ徳治二年 日尚上人乃

草創ありて宗祖大士の像、日祐上人の作なり 日祐上人、中山の第

宗法盛なり、頭一夜宗祖上人微妙の音ありて讀經、日尚上人、附屬あり、則ち坐、小、音、趣、と

愛中感得の影、像と摸造、を、眼、供、養、日、尚、上、人、小、附、屬、あ、り、則、ち、坐、小、音、趣、と

注し置、る、は、な、し、世、俗、讀、經、の、高、祖、大、士、と、稱、せ、り、夫、上、り、後、ハ、修、飾、と、加、さ、る、毎、々、中、山、は、告、る

水神宮 日尚上人、尚寺、開、創、の、主、ハ、平、氏、の、末、裔、多、り、と、云、公、安、七、年、甲、申、或、ハ、正、康、二、年、乙

漁人五郎、何、某、多、る、の、助、け、申、す、其、生、来、と、用、て、自、通、家、何、某、ハ、い、ふ、一、つ、た、り、て、か、し、く、不、成、ひ

傍、草、卷、と、い、ふ、廣、宣、流、布、の、志、願、を、り、此、水、神、宮、日、尚、上、人、初、洞、舟、來、一、此、地、妙、見、山、の



葛西六郎墳墓
葛西上子茶村
普賢の境内
あり

時、上、人、の、慈、眼、と、な、て、後、不、退、一、斬、の、法、味、と、な、つ、つ、ら、ま、し、と、あり

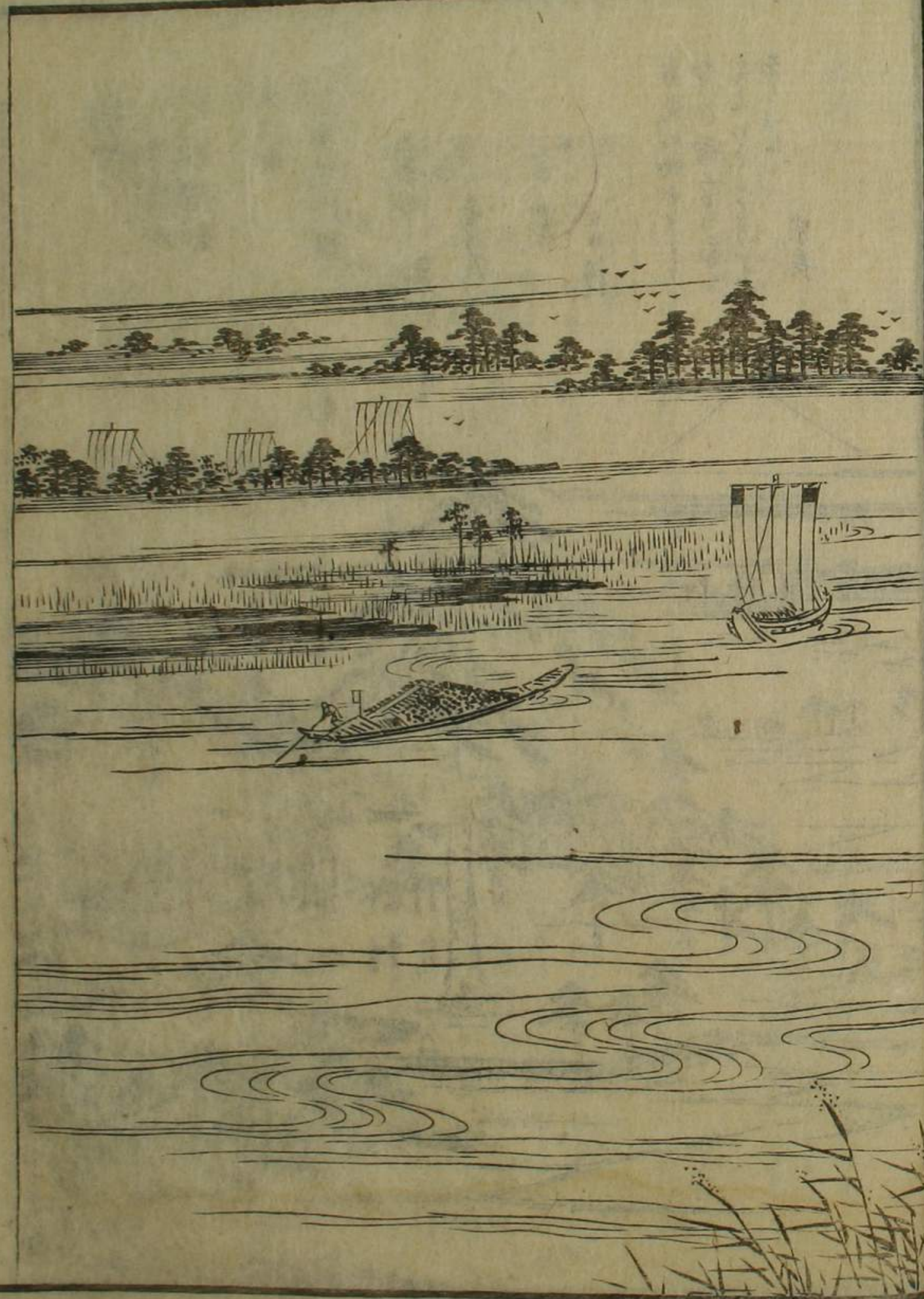
二之江
妙勝寺



二之江

二の江より今井
舟は桑川あり
不産する海苔と
世に著西海苔
と稱す本草に
所謂紫菜の類
中々流草海苔
又異あり





いまわ
今井の津頭

柴屋軒宗長永正
年の記行東土産
隅田川の河舟よて
葛西の府のうち
を半眩をり
葎をあらき今
井の津より
下て浄土門の寺
浄興寺小立をて
とあれはとく

此津の
あり
あれ
たり



今井
淨真寺
琴彈松

東土産

阿彌陀根

まきやぐぬ

雪の

千里

うね

方丈の西小さ

むらひ雪うりや
見えやうりや
あり云

宗長



和奇と詠せし是より後琴ひき松と号せり

武蔵野紀行

此寺内ふらふら一宿せり
松尾入琴といふこと
あり云

松尾のひき雪うりやまきやぐぬ
北条氏康

按氏康紀行の記せし淨真寺と世人木下川の淨光寺と思ひあやまれり
既ふ久し寺号ハ松尾といふ文字與と光との違ひあり氏康ありハ宗長の記
共ふやうのあり文字淨真寺といふハ松尾といふ寺をさしめり
下川の淨光寺ハ慈覺大師開創の精舎や天台止觀の法燈
當寺ハ記主禪師の開基やといふハ淨業の弘刹なり
古撰あり又東土産と述ぶるや當寺ハ西南の於遠くひきけ芙蓉の峯に相對
眺望せり宗長ハ句意となつたり然る時ハ此寺の何の紀行を明澄とあり

天川山妙福寺 下鎌田村にあり淨真寺の北二町半を隔淨土

宗中々上今井村金藏寺に属中興閑山ハ徳譽岌公和尚と号

本号ハ阿彌陀如来なり

親鸞上人御影堂

本堂の前左の方より相傳ハ昔親鸞上人東國遊化の頃
此地をよきりあり時平早魁や里氏の輩
あは上人清奴の祈念あり
三年癸酉の歳自身の肖像を造りて置あり
毎歲四月八日より

天文十五年秋小田原の
 北條左京大夫氏康むすこ
 野小鷹狩の時葛西の
 浄真寺に一夜のやうと
 とらられ松風入琴と
 詠せし
 和奇と題
 武蔵野
 紀行
 えん

松風乃

吹こゑ
 きけ



あゝ
 ちん
 こゝろ
 まる
 け
 北條氏康



帝

同十日迄佛龕を削き観音上人の鏡池本堂の後あり上人自ら肖像を造りたるなり此池は面影を映す 袈裟懸松洞傍あり旧樹ハ太子堂本堂の前右の松あり 太子堂御影堂は相對せり聖徳太子の御影を安中太子自ら作らせり云傳はる毎歳二月廿一日祭あり 釋天王 柴又村經泉山題經寺は安置也江戶二里判 當寺ハ寛永年間江戶の草創なり

縁起云當寺第九世日敬師在任の頃堂宇大ニ破壊を師深く是を歎き普く四方を行乞し再興の志を勵し終ニ其堂舎を造改んとす時梁上より此枝木を得たり旧當寺ハ高祖大士手刻の祈禱本と稱せるとのあり由云傳へし其の傍

此時に至りて空くわう 則すなはち 本もと 寺てら 長なが 二に 尺じゆく 寺てら 厚あつ 五分ごぶん あり 梨なし 板いた かり 片かた 面めん ハ 中ちゆう 央おう あり 首くび 題だい あり 左ひだり 右みぎ あり 花はな 押おし あり 又また 疥せう 即すなはち 消滅しょうめつ あり 数字じすう を 刻きつ し 其その 下した 五月ごがつ 日にち あり 大だい 士し の 子こ あり 花はな 押おし あり 又また 片かた 面めん あり 帝てい 親おん 王おう の 影かげ あり 右みぎ の 手て あり 左ひだり の 手て あり 信しん 純じゆん の 鞆たもと あり 是こゝに 除ぞく 禪ぜん 延えん 壽じゆう の 本もと あり 惡あく 覺かく 降かう 伏ふく あり 希まれ 代しろよ の 本もと あり 推おし 古こ 撰せん の 四よ 天てん 王おう 寺てら あり 初はつ 帝てい 親おん 天てん 降かう 臨りん あり 俵わたらひ 申まをす の 日にち あり 當あた 寺てら の 板いた あり 出で 現げん あり 又また 俵わたらひ 申まをす あり 因よ 緣縁 あり 此こゝに 日にち あり

